明治以降リライトされた「有頼立山開山説話」に関する一考察
―様々なサブストーリーの存在とその拡散をめぐって―

吉野　俊哉

はじめに

立山は、長い歴史の中で多くの伝説に彩られた山である。それは、古くから立山がそこに生きる人々の生活と密接に関わってきたことを示すものだが、立山信仰と関係する有頼の立山開山、女人禁制、山中の地獄や浄土にまつわる説話には、自然環境や景観に異界との接点を見出した、精神世界との深い結びつきが感じられる。立山は、そこに住む動植物や岩石、そしてあの世に纏わる伝説を生むインスピレーションに富む山だったとも言えよう。

その中で、佐伯有頼の立山開山は、立山信仰の始まりを印象づける説話である。立山曼荼羅諸本にも重要な要素としてその場面が描かれ、立山の衆徒が檀那場廻りで各地へ赴き立山曼荼羅の絵解きでも語られた、立山信仰の歴史やその権威付けとなる説話であった。

この、立山を開山したのは有頼だとする説話は、芦峅寺、岩峅寺の宿坊家に伝来する小縁起や略縁起（以下これらを総称して、立山縁起諸本）に見られる。『伊呂波字類抄』十巻本（鎌倉時代初頭）では有頼ではなく父の佐伯有若であったり、『類聚既験抄』（鎌倉時代）では一介の狩人であったりもするが、有頼の名前が現れるのはそれ以降である[(1)]。その後江戸時代には『和漢三才図会』（正徳２年〈1712〉）が刊行され、巻之六十八には「佐伯有頼の開山」を記した長文の説話が載り、広く流布した。同書にはその情報ソースを「彼ノ山ノ伝記ニ曰ク」と記しているが、これは編者寺島良安が岩峅寺の衆徒に取材したものと見られる[(2)]という。

現在立山博物館では、常設展示の音声解説や展示解説を求められた際にも、広く知られた有頼が立山を開山する説話（以下、「有頼開山説話」）を紹介している。

広く認知される「有頼開山説話」には、白鷹を追って山中を行く有頼が遭遇する様々な説話（以下、有頼が立山の麓から玉殿窟へ熊を追い詰めるまでの様々な場面に挿入された諸説話を、「サブストーリー」と総称する）が挿入されている。それらには立山縁起諸本に見えるものの他、後世に潤色された有頼の行動や立山山中の場所をめぐる地名譚、冒険譚などが多数ある。口承による説話なのでそれらの作者は特定できないが、その中には有頼が遭遇する出来事に対し芦峅寺と岩峅寺では異なった解釈による説話の併存が散見される。共通する内容の他に、芦峅寺と岩峅寺ではそれぞれの立場や立地を背景に別々の物語を創作し、複数の「サブストーリー」を別々に伝承しているのは、その背景に両村での衆徒たちと立山信仰との関わり方には微妙な違いがあったからであろう。

その要因としては、それらが主に絵解きなどを通して、口伝で継承されてきたことがある。立山曼荼羅の絵解きは、衆徒が皆同じ台本を用いて暗唱したものではない。各宿坊家では、自坊に伝わる立山縁起諸本を基に細部に潤色を加えながら、自坊の立山曼荼羅を用いて語り継いできた。廣瀬誠氏は「絵解きにあたつては、自坊伝来の縁起が典拠で、これを骨子として解説したものと思われるが、縁起の中では簡単にしか書かれて居ないものもあつて、それ自体は台本にはなり得なかつたと思われる。おそらく縁起に付随して、親から子へ、子から孫へと口伝えに伝えた伝承があったのであろう。坊の中には台本のあった坊もあっただろう。」と指摘している[(3)]。その際、衆徒にとって聴衆を満足させられる絵解きの内容は信者の獲得や護符などの頒布数に影響し、収入にも直結したであろう。そうであれば、興味を惹くような内容を工夫し聴衆を話に引き込むテクニックもまた必要だっただろうし、伝承する中に演者の解釈で様々なエピソードを挿入していっ

たことも想像される。その意味で絵解きは話芸であり、例えば古典落語では基本ストーリーを基に演者がマクラを工夫しながら聴衆層や時代に合わせて洗練されていったのに似ているとも言えよう。

また新たなエピソードが挿入される機会は、実際の立山禅定登山の山中でもあり得る。各地から立山を訪れた禅定登拝者を山中で案内した仲語は、単なる道案内ではなく、途中の名所にゆかりの説話を語り立山が育んだ信仰世界を伝える役でもあった(4)。彼らが案内の時、自らの知識と目の前にある山中の光景から、或いはサービス精神から作り出したストーリーを説話に加えていった可能性が考えられるからである。実際にかつては、禅定道途中の場所にエピソードを創作して付け加え、時に誇張し出任せに近い荒唐無稽な物語で禅定登山者たちを楽しませることもあったようである(5)。

これを踏まえた上で次に疑問としたのは、そのような解釈の異なる「サブストーリー」が、現在までどのように拡散して知られてきたかという点である。

「有頼開山説話」が、信仰に結び付いた伝承ではなく立山に伝わる説話の一つとして知られるようになったのは、近世まで口伝されてきた「サブストーリー」を採話して活字にした明治以降のことと思われる。それによって、宗教的な関心に拘らず昔話やお伽噺の一つとして幅広く読まれていくからである。このような、物語性の高い寺社縁起が基になったお伽噺は珍しくはなく(6)、広く知られる「浦島太郎」が、元は丹後の宇良神社の縁起物語であった例もある。

そこで小論では、「サブストーリー」拡散の実態を調査するため、明治以降に刊行された活字本に見える「有頼開山説話」を抽出し、内容や表現のバリエーションの分類と比較を行った。

その結果、明治30年代半ばから現在に至るまで、解釈を異にする「サブストーリー」が、基にした出典を明示しないまま内容や表現を変え、肉付けしたり要約したりして新たに作品として発表されてきたことが明らかになった。それらは説話集や冊子に繰り返し収録され現代も読み継がれているが、そのようなバリエーションが現在広く知られ受け入れられている背景には、明治から大正の頃に「有頼開山開説話」を潤色して創作されたリライト童話の存在が大きかった。具体的には、巌谷小波や久留島武彦たちによる近代児童文学成立の中で、神話や伝説、昔話を採話し子供向きにリライトした「お伽噺」の創作や口演童話の活動に共鳴した富山の童話作家大井冷光の活動がある。

そこで次章以下「有頼開山説話」について、先ず芦峅寺と岩峅寺に伝わる立山縁起諸本や宿坊家出身者の著作に収載された説話などを基に、「サブストーリー」の特徴的なバリエーションを整理して考察を加える。そして、明治以降刊行された説話集や冊子などを資料とし、玉殿窟へ向かう途中の場所や有頼の行動を描写した「サブストーリー」の種類やリライトの系統、内容や表現の変化を整理し、そこから「有頼開山説話」がこれまで県民に広く知られるようになってきた経緯とその背景を考察する。

なお以下、作者が何時かの機会に、それまで口伝で伝えられてきた「有頼開山説話」を聞いていたか、或いは新たな取材などで関係者から聞き取ることを「採話」とした。それをそのまま、或いは解釈を変えたり、潤色したりして作品化し公表すること、また既に公表されていた作品を、更に内容や表現の部分的な改変、編集したりして公表することを「リライト」とする。

1.「有頼開山説話」の基本プロット

小論では、当館展示館で立山曼荼羅の展示に設置する音声解説から「開山説話」の紹介を文字に起こし、以下にゴシックで示した部分を「基本プロット」、これに挿入される諸説話を「サブストーリー」として扱う。

父有若の可愛がっていた白鷹を放してしまった有頼は、布施城から白鷹を求めて山に向かって行くと熊に出会った。有頼は熊に矢を射、熊は血を流しながら立山山中深く入っていく。有頼は逃げる熊を追って山中へ。やがて熊は洞窟に姿を消した。〈有頼は続いて洞窟に入ると、突然洞窟の奥からまばゆい光が差し、そこには阿弥陀如来の姿があった。有頼はこの霊異に感動し弓を折り、出家して慈興上人となり、立山を

開いた。〉 ※〈　　〉内は小論では比較の対象外とした部分である。

この粗筋のような基本プロットを補うように、「サブストーリー」を挿入し内容を膨らませて「有頼開山説話」が形成されている。

なお、立山縁起諸本を比較すると、玉殿窟での阿弥陀如来との接触や、その場に現れる諸仏、出家し慈興となる際に師とした高僧との関係にも芦峅寺と岩峅寺では異なった説話が併存しているが、小論で取り上げた「サブストーリー」に直接関係しない部分は割愛した。

２.「サブストーリー」のバリエーション

最初に、伝承する「サブストーリー」の様々なバリエーションを分類して出典と共に挙げておく。口承により数字や名称の細部に錯誤が生じるのは当然としてここでは対象とせず、解釈の違いによるバリエーションを比較分析するため、次の二種類の資料を用いた。

一つは翻刻された立山縁起諸本である[7]。岩峅寺や芦峅寺の宿坊家が旧蔵した立山縁起諸本には、それぞれの解釈による差異を含む。その中から芦峅寺に伝わる「立山略縁起」(芦峅寺相真坊旧蔵、享保元年〈1716〉改記、以下「**①略縁起**」)、また岩峅寺に伝わる「立山小縁起」(岩峅寺雄山神社蔵、以下「**②小縁起**」)、「立山縁起」(岩峅寺延命院蔵、嘉永６年〈1853〉写本、以下「**③縁起**」)。その他に「有頼開山説話」の記載がある『和漢三才図会』(寺島良安編、正徳２年〈1712〉刊、以下「**④三才図会**」)、岩峅寺宿坊家の絵解き台本と考えられ、サブストーリーが豊富な『立山手引草』(岩峅寺延命院蔵、嘉永７年〈1854〉写本、以下「**⑤手引草**」)。

もう一つは、立山の宿坊家に伝わる様々な伝承を古老から身近に聞くこともでき、また伝来の文書に目を通せる立場にあった宿坊家出身者が、立山信仰で継承してきた様々な文化や歴史を記録し、その考察を纏めた著作である。これらは昭和30年代から50年代にかけて刊行され、その後の立山信仰研究の重要な基礎資料となったものである。佐伯幸長氏(芦峅寺大仙坊出身)の『霊峰立山』(立山開発鉄道、1959年刊、以下「**⑥霊峰立山**」)、『立山信仰の源流と変遷』(立山神道本院、1973年刊、以下「**⑦源流と変遷**」)、「立山をめぐる伝承説話」(高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』所収、名著出版、1977年刊、以下「**⑧伝承説話**」)では、芦峅寺に伝わる説話を聞き取り収録している。また佐伯立光氏(芦峅寺泉蔵坊出身)は『立山史談』(私家版、1965年刊、以下「**⑨立山史談**」)で「立山の伝説について」と章立てし、「享保元年改記の立山案内記による」とした立山山中の様々な場所に纏わる伝説を紹介している。同書では複数存在するバリエーションを「また一書に」や「また一説には」、「別の話では」に続けて具体的に記している点に特徴がある。但し、その部分に明確な出典が示されていないのは、同種の説話が口承のみ、または限られた私的な文書で伝えられてきたためであろう。

以下、基本プロットに従って５つの場面に分類し、その場面の「サブストーリー」を整理しておく。

２－１　有頼の出自について

「**④三才図会**」や岩峅寺に伝わる縁起類では、有頼は父有若と一緒に越中へ下向し、有頼は越中に来たことで初めて立山開山に関わることになる。一方芦峅寺に伝わる「**①略縁起**」では、有頼は逃げた鷹を追っていて偶然立山を開山する立場になった訳ではなく、予め立山を開くべき「選ばれた人」として、越中で神から授かった形に伏線が張られている。ただ授けた神は「大汝山の神」や「刀尾天神」[8]などと揺れが見られ固定していない。その立場は、「立山に在す神仏」の範疇で緩やかに解釈して語られていたようである。

（１）下向時に子供の無かった有若が神に祈り、越中で有頼を授かるもの

①居城相続に一子なく、故に御夫婦共に城内に鎮座の住神に誓祈を願玉ふに、三七日の満願、暫く寝玉

ふに、不思議なる哉、宮殿の扉左右に開、中ニ八旬余の老人鬚をたれ、右の手に金扇を持、左の御手に白羽の鷹を止、汝有若告て玉わく（中略）一男を与ふ、（中略）御夫婦ハ漸く夢さめて、御喜悦不斜、（中略）玉を欺く男子御誕生ましまして、御夫婦の寵愛浅からず、是を名けて有頼公と申すなり「**①略縁起**」

②有若には年来子供がなく、大変さびしい生活を送っていたが、夫婦相計って東方の神仙に心願を立てて祈っていたところ、或る夜枕もとに神立ちあがり「我は大汝山の神である。汝らに一子を授ける。生まれたならば有頼と名づけよ」と言葉を聞いた。やがて一人の男子が出生し、有頼と名づけられた。「**⑥霊峰立山**」

③唯一の悩みは後嗣のないことである。名門の常として後嗣のないことは何にもまして残念でならなかった。有頼夫妻は何とか望みを叶えたいと、常に東方の神に祈っていた。一夜、奥方の枕辺に白衣の明神が神立ち、「汝の信行により一子を授く、有頼と名付くべし、吾はこれ刀尾明神なり」と申された。夫婦待望のうちに玉のような男子が出生した。すなわち有頼と命名された「**⑧伝承説話**」（「**⑦源流と変遷**」も同意）

（２）父有若が有頼を伴って下向するもの

①有若卿同嫡男有頼移㆓リ住㆑ス当国保伏山㆒「**④三才図会**」

②妻ハ都四条ノ主ナキ屋形ニ残シヲキ御父子［嫡男ハ／有頼公ト云］同様ニ荘リ今ヲハシメノ田舎旅「**⑤手引草**」　※［　］内は割り注、以下同じ。

③越中守佐伯有若朝臣、始㆓庁府㆒、仝二年九月十三日嫡男有頼、入㆓新川郡布施院㆒「**③縁起**」

（１）は芦峅寺に伝わる説話、（２）が岩峅寺に伝わる説話である。芦峅寺では開山堂に慈興上人坐像を祀り、入滅の地として御廟もあるためその存在を尊重し、有頼の権威や格式を高めるために、出自は神の啓示によることが創作されたのではないかと思われる。

２－２　白鷹を求める途中に遭遇する神仏たち

「サブストーリー」では父有若に叱責され白鷹を探す路中、様々な神仏からその行方を教えられる。熊と出会う伏線として、立山信仰に関わる神仏たちの加護を受け、「立山ゆかりの神仏が手を貸す」ことで有頼の特別感が色濃く表れているようである。

（１）森尻権現などに遭遇し、白鷹の行方を教えられるもの

①於㆑是森尻ノ権現示現シテ曰ク、汝当㆑尋㆓ヌ辰巳ノ方㆒ヲ「**④三才図会**」

②粤ニ有㆓リ化人㆒［謂㆓森尻権／現化現㆒也］示曰ク、化鷹ハ者入㆓ル巽之山㆒ニ、速ニ逐㆑ヘ之ヲ「**②小縁起**」

③粤に森尻権現容顕シテ（中略）是ヨリサキ辰巳の山ニ分ケ入リ尋ヌヘシ「**⑤手引草**」

④途方に暮れていると、森尻権現の神が示現して、「汝の尋ぬる鷹は辰巳の山中にあり」と示された。「**⑧伝承と説話**」

⑤木根岩角枕とし臥玉ふに、不思議なるかな、八十余の老人現れ、有頼に告て曰く、汝尋る、熊鷹ハ、従㆑是東南の嵩峰ニ登り、依て血汐を導となし、尋ね行くなバ再び手ニ入るなりと告玉ひて、姿ハ消て、夢覚にける「**①略縁起**」

以上が、有頼が白鷹を求めて布施城を出発し、途中神仏と遭遇する場面である。「森尻権現」の示現が４例、正体が明かされていない神仏と出会うものも１例見られる。何れも鷹の逃げた方角は辰巳（東南）で共通しているのは、最終的に玉殿窟へ向かうことの伏線になっているためであろう。

「**①略縁起**」では、正体を明らかにしていない「八十余の老人」から白鷹の行方を告げられるが、これは（１）

の①で有若の夢枕に立ち有頼を授けた「八旬余の老人鬚をたれた神」と同一神と思われ、有頼の守護神に設定されているようである。

（２）刀尾天神（天手力雄神・本地は不動明王）と遭遇するもの

①有頼問ふ君は誰そ　答て曰く　我は当山力(ママ)尾天神なり「**④三才図会**」

②有二異人一、右ノ手ニ執リ二利剣一ヲ、左手ニ持二シ念珠一ヲ云ク、我ハ是雄神山ノ之地主也［謂二刀尾天神／化現一ト］「**②小縁起**」

③八旬ニアマル老僧ノ色ロ黒ロク額ニハ水波ノ皺ヲタヽミ恐シゲニキバクイチガエ右ノ手ニハ利剣ヲモチ、左ノ手ニハ念珠トヲボシキ物ヲ持テ給ヘテ大盤石ノ上ニ御声高クシテ言ク 我レハ是立山ノ地主刀尾天神即チ太刀雄尊ニシテ不動明王ナリ「**⑤手引草**」

④一老人立ちて右に劔を持ち左に念珠をまさぐりて曰く、「吾は当山刀尾天神なり、汝の求むる鷹は大川の対岸に止まれり」と「**⑧伝承説話**」

②、③、④は不動明王の姿そのものの描写であり、岩峅寺では「有頼は不動明王に助けられて立山へ導かれる」というプロットを重視していたように見える。

（３）金剛童子と遭遇し同行するもの

①我（註：不動明王）今可レ附属二スー奇童子一ヲ［謂二金剛童／子化現一ト］、与共レニ之ト可二シ跋渉一也「**②小縁起**」

②汝ヂ（註：有頼）カ尋ル鷹ノ東ニ逍遊ス心ヲ改テ金巌ニ登ルベシト言ヘテ則ト金剛童子ヲ倶(トモニ)ツケ給ヘ此所ニテ重テ会ヘシト謂テ見ヘ給ス「**⑤手引草**」

（３）の①、②は共に岩峅寺に伝わる説話だが、何れも刀尾天神（本地は不動明王）から金剛童子を供に付けられている。不動明王（刀尾天神の本地）の眷属八大童子の意と考えれば、これが有頼を守護するために現れたことと矛盾しない。これも（２）の④と同様、有頼が不動明王の加護を得て立山を開く伏線と見てよいだろう。金剛童子は有頼の称名川渡河の場面でも関係しており、そこに現れる「黄金の獅子」との関連については後述する。一方、「**①略縁起**」に金剛童子の記述は見られない。

（４）芦峅で３人の老婆に遭遇し、試問されるもの

この説話は芦峅寺に伝わる説話で、岩峅寺の説話には見られない。芦峅寺で遭遇する老婆３人は媼堂に祀られる３体の媼尊本尊を想起させる。ここに見られるもう一つの特徴は、３人の老婆たちから「ここから先は険しい道のりだが、耐える覚悟はあるのか？」と意思を確認され、芦峅寺を過ぎて異界へ足を踏み入れる点である。有頼は立山を開いた志操堅固で立派な人物であり、その子孫を称する芦峅寺の佐伯一族にもその精神が受け継がれていることを強調するような部分である。ここでは有頼の存在感、或いは親近感に対する、岩峅寺との微妙な意識の差が関係しているのかもしれない。

①アシが繁って草むらをなせる神座（芦峅）があり、その側に白髪を垂れ長杖を持った三人の老婆が待っていた。老婆は有頼に向って「汝の尋ねる白鷹は東の山にいる。汝が行けば必ず得られるが、その山は川あり坂あり、道もなく難儀である。汝もし勇猛心と忍耐力がありあくまで初一念を貫かんとするならば上れ。苦しみを厭うならば、早々にここより立ち帰れ」と教えさとした「**⑥霊峰立山**」（「**⑦源流と変遷**」も同意）

②三人の老婆神が右手に長杖を持ち、左手に麻の葉を持って現れ、有頼を優しく労りながら「汝の求むる白鷹は東方の山上にあり、山中七日七夜の苦を経ざれば到達すること能わず、汝いかなる困難にも

耐ゆる決心あらば是を得ること叶うべし。若し耐ゆる心なくんば此処より直ちに引き帰るべし」と。「**⑧伝承説話**」（「**⑥霊峰立山**」も同意）

明治以降のリライト作品では、この部分は有頼の英雄像を強調するように取り上げられている。

２－３　称名川を渡る場面

有頼が川を渡った方法には、設定の異なる二つの説話が併存する。一つは猿が藤蔓を編んで橋を架けるもの、もう一つは獅子（狻猊）[9]が現れて有頼を背に乗せるもので、前者は芦峅寺、後者は岩峅寺に伝わる説話である。前者は「藤橋」の由来として知られるが、明治になって、先ず採話され活字になって拡散したのは後者の方であった。

（１）芦峅寺に伝わる説話

①思案にくれていると大勢の猿が出てきて、藤つるを使って細い橋を架けてくれた「**⑧伝承説話**」（「**⑥霊峰立山**」、「**⑦源流と変遷**」も共に同意）

（２）岩峅寺に伝わる説話

①（註：川に臨み）此時大地震動ス如レ見ニルカ狻猊ヲ異獣、跪ク前ニ、奇童（註：金剛童子）ノ云ク、跨レリ之ニ可シ以テ渡ルル深澗ク「**②小縁起**」

②Ⓐ葛ラ一筋ジ渡リテ赫ニソマレリ　弥熊ハ此ノフチヲツタヘシト見給フ所金色ノ師子イデタリ　時ニ金剛童子ノ言フハ「彼ニノリ玉へ、我モ共ニ」師子不レ見依テ爰ヲ金坂ト云［Ⓑ此由来ヲ以テ／今マ藤橋ナリ］「**⑤手引草**」

２－３－１　藤橋の地名譚としての説話

２－３の（１）が「藤橋」の地名譚となる。この説話は衆徒が絵解きでも語っていたようで、芦峅寺の宿坊家と関係が深い立山曼荼羅のうち９点（表１参照）では藤橋付近に猿が描かれている。また「**⑨立山史談**」ではこの説話のバリエーションとして、「道元禅師が立山を参詣した際に川が増水して渡れず、やむなく岩の上で座禅して減水を待っていると向こう岸から12匹の猿が現れ藤蔓で橋を作り道元を渡らせた。振り返って見ると藤蔓は南無阿弥陀仏の文字の姿に絡められており、猿は十二光仏に変化して紫雲に乗って光明を放ち姿を消した」という説話を載せている。猿を描いた立山曼荼羅９点のうち、５点には旅装の僧侶が、また４点には石の上で座禅を組む僧侶が一緒に描かれている。後年、高僧が立山を訪れていたと喧伝することで、布教の際に立山の権威や宗教的な格式を高めようとした意図が窺われる[10]。

ここにあるような「猿が蔓を使って橋を架ける」説話のモチーフを探してみると、動物になった釈迦や菩薩の前世譚の仏典「ジャータカ」の中に類似したプロットが見える。その第407話「大猿前世物語」（パーリ仏典小部経典第二編第二章「ガンダーラ品」所収）[11]には、「猿の王が敵（人間の兵士）に囲まれた猿たちを、川を渡らせて助けるため、川岸の籐の蔓を切って自らの腰に巻いて向こう岸に渡り、川の上に蔓を渡し自己犠牲を払いその上を猿たちに渡らせる」という非常によく似た部分がある。現時点で具体的に両者の接点を示す根拠はないが、ここでは仏典を通した宗教的な関連から、芦峅寺に伝わる藤橋の説話がこのプロットから何らかの影響を受けた可能性を提起しておく。

一方、（２）では供の金剛童子に助言され、その場に現れた獅子の背に乗り川を渡る。この説話では直接「藤橋」の名称は結びつかない。しかし「**⑤手引草**」では、絵解きの際に「藤橋」との繋がりを補足するように、有頼が獅子に乗る前の部分に下線Ⓐ「葛ラ一筋ジ渡リテ赫ニソマレリ　弥熊ハ此ノフチヲツタヘシト見給フ」とある。これは川の上を渡る一筋の蔓が赤く（血で）染まっていることから、矢を受けて血を流した熊がこ

の蔓を伝って川を渡ったことを示唆し、これを受けて下線Ⓑ「此由来ヲ以テ／今マ藤橋ナリ」と説明がある。岩峅寺では、逃げる熊が藤蔓の縁を（橋のように）伝って渡ったことで藤橋の由来とする解釈があったようである。

２－３－２「獅子」の解釈

「⑤**手引草**」に出てくる「金色ノ師子」とは、「②**小縁起**」では「狻猊を見るが如き異獣」とあるように、元来は唐獅子のような聖獣を指していたことは、岩峅寺の宿坊に関係が深い立山曼荼羅３点（表１参照）に唐獅子、或いは唐獅子と有頼を描いた場面があることからも分かる（写真１参照）。

しかし、後年には口承するうちにこの「獅子（ししし）」が「獣（ししし）」と混同して語られていったようである。「獣（ししし）」は猪（いのしし）、鹿（かのしし）、羚羊（かもしし）などの総称として使われた語であるため、口頭では衆徒や仲語が区別せず卑近な猪を想起して「シシ」と語っていた可能性がある。但し、各宿坊家の解釈によってバリエーションが生じていたと考えられるからである。但し、現存する立山曼荼羅に「猪（いのしし）」の姿で描かれるものはない。もし唐獅子が描かれた立山曼荼羅を用いて絵解きをするのであれば、それを猪と混同していたとは考えにくいだろう。口承によって「シシ」の解釈に違いが生じ、明治以降採話された際には「黄金のいのしし」として拡散し、有頼を渡すために「現れた」場所よりも渡り終えて「消えた」場所に黄金坂の地名譚を当てはめて伝承していた可能性がある。

そして実際の藤橋について、芦峅寺では猿による渡橋や高僧がそれを渡る説話によって「藤橋」の価値を印象付けようとしたのに対して、岩峅寺では「藤橋は当世に禅定登拝のために架けられたもの」であり、その事実を所与のものとして[12]、それ以前（橋が架かっていなかった頃）の有頼は刀尾明神（不動明王）の力を借りて渡河したことにポイントを置いたのではないかと推測する。その際、「獅子（狻猊）の背に乗る有頼」のモチーフとしては、白鷹を探す方向を刀尾天神（不動明王）が示していること、不動明王の眷属金剛童子が供に付き添うことから、有頼を当初から特別な聖なる存在と位置付けるため「獅子座に座る仏の姿」[13]がイメージされていたのではないかと推測する。

２－４　黄金坂・草生坂にまつわる説話

２－４－１　黄金坂の地名譚

２―３の（２）で岩峅寺に伝わる説話の②に挙げた「⑤**手引草**」の「師子不レ見依テ爰ヲ金坂ト云」を見れば、有頼を乗せて川を渡り終えた後、獅子がいなくなった場所を「黄金坂」とする地名譚となっている。しかし「黄金」の言葉が最初に出るのは獅子が現れた場所であり、この言葉を地名譚にするならば「出現した場所」をそう呼ぶ方が自然な成り行きではないかと思われる。事実、現存する立山曼荼羅ではすべて川の手前に獅子が描かれている。

事実関係に照らすと、かつて川の両岸には「座禅石」と「黄金石」と呼ばれる二つの大岩があり、それを藤蔓でつないで「渡し」が架けられていたという[14]。それを踏まえて考えると、元々渡河に纏わる説話は、川の手前側で座禅石に纏わる「座禅を組む僧の説話」、河上に渡された藤蔓の索道に纏わる「猿の藤橋架橋の説話」、そして河の向こう岸では「黄金石に纏わる説話」の三つが類話として別々に伝わっており、後年に元々黄金石があり「黄金坂」であった場所に、岩峅寺では有頼が渡り終わった場所という意味で獅子が消えた場所とする説話を被せたものではないかと思われる。

また「⑨**立山史談**」に載る道元禅師の説話は、芦峅寺の人々が川の手前にある座禅岩に高僧が立山を訪れその上で座禅を組んだ岩、藤蔓を渡して架けられた橋には、猿が架けたという因縁を被せたものではないかと思われる。

「獅子」が消えたことによる「黄金坂」の地名譚が岩峅寺の伝承だった一方で、芦峅寺では「シシ」を鹿と解釈した地名譚もある。

・また一書に、佐伯左衛門尉越中守有若公嫡男有頼が、父寵愛の白鷹を求めて深山に入りしばらくして坂に入ると、突然黄金の色をした一頭の鹿が出現して行手をさえぎった。有頼は、その鹿が放った毒気に当たって倒れた。黄金の鹿が現れたところから、この坂を黄金坂と名付けたのだとある「**⑨立山史談**」
・（註：渡河の後有頼が）幸いと喜んで行くと一頭の黄金色の鹿が前を塞ぎ、有頼はその毒気に当って倒れた（黄金坂）「**⑦源流と変遷**」（「**⑥霊峰立山**」も同意）

ここで注目したいのは、岩峅寺の説話で当初「獅子」であったものが、「獅子」と同音の「獣」と混同して猪へ解釈が変化したのとは別に、芦峅寺では鹿と解釈した説話が生成していた点である。この説話では「黄金色」の部分を「黄金坂」の地名譚に、また鹿の毒気を解毒した薬草が生えていた場所を「草生坂」の地名譚にする。但し、鹿の出現場所が曖昧で黄金坂の地名が出てこない場合もある。

立山曼荼羅の中に１点だけ、藤橋を過ぎてすぐの黄金坂付近に、倒れて横になった有頼を描いたものがある（表１、写真２参照）。鹿を描いた立山曼荼羅は現在まだ見つかっていないが、この事例は、絵解きでは有頼が黄金坂で鹿の毒気に中る話をすることがあった可能性を示唆している。

またこの他、獣にはカモシカの意味もあるので、「シシ」に羚羊の字を宛てている例（**２－４－２**の①参照）も見られた。

２－４－２　草生坂の地名譚

芦峅寺では、黄金坂に続く草生坂に鹿が登場する説話にも細部の異なるバリエーションが存在している。

①この坂（註：黄金坂・草生坂）に於いて黄金色の羚羊に出遭い、その毒気にあたり、気を失って倒れたその時熊王権現示現して曰く「汝、手当たり次第の草を採りて口中に入れるべし」と。有頼夢中に示現の如くに喰めば神気たちまち清爽となる。この羚羊に出遭いし坂を黄金坂と称し、草を喰みし坂を草生坂と称し「**⑧伝承説話**」

②また一書に、有頼が、黄金の色をした鹿が放つ毒気に当たって倒れていると、薬師嶽の守護仏が現れ、汝、最初に触れたる草を採りて食べよ、と告げられましたので、有頼は最初に手に触れた草をとって口にすると、不思議や病は体を離れ、心身共に生来の姿に戻りました。それ故、この坂を草生坂と名づけたものであるとある。「**⑨立山史談**」

③その時（註：黄金坂で鹿の毒気に中って倒れた後）、薬師嶽の神が現れて『汝、倒れるままに手に当る草を採りて口に入れよ』と告げた、有頼が苦い草を口に入れると忽ち心気さわやかとなり病気はなおってしまった（草生坂）「**⑦源流と変遷**」（「**⑥霊峰立山**」も同意）

以上の点から考えると、芦峅寺と岩峅寺には共に「黄金色のシシ」という原型が存在し、異なる解釈によって岩峅寺では獅子を介して渡河と黄金坂の説話をセットで見ているのに対し、芦峅寺では渡河とは別に黄金坂と草生坂の説話をセットとしているようである。

何れの場合も、危機を乗り越える冒険譚として有頼の英雄像形成に資するものであるが、芦峅寺の方には有頼に対して、倒れても立ち上がる、より大きな困難を乗り越える強力なイメージ作りに繋げようとした意識が感じられる。

これまで、草生坂の説話は立山に産する薬草のイメージアップで生まれたと思っていたが、その他に有頼の冒険譚として玉殿窟にたどり着くまで神仏の加護を受け、その困難を乗り越えていく試練を強調した意図も読み取るべきであろう。黄金坂は禅定道中では具体的にイメージするのが難しいためか、その前後の渡河や薬草（草生坂）を引き立たせるお膳立てのような印象も受ける。明治以降のリライト作品で、必ずしも猪の消えた場所を黄金坂と呼んでいなかったり、黄金坂説話そのものを割愛したりしている作品が散見される

のも同様である。

２－４－３　草生坂の薬草と神仏の霊威

草生坂と薬草の説話には、鹿が登場せず神から薬（神丹）を授けられて有頼が危機を救われるバリエーションもあるが、前項の①～③が鹿の毒気による中毒なのに対して、以下は傷（外傷）である。

・立山開山の人、有頼が、熊・鷹のあとを追って道なき山坂をよじ登り、全身に傷を受けてようやく玉殿窟に辿りつきましたが、傷口がますます痛み出し、起居も自由にならないことから、これも皆宿世の業なりと前非を悔し、もはや自害しておわびしようとするに、この時、薬勢仙人が現れ、この薬を傷口にと神丹を授けられた。この神丹によって、傷もなおり、立山を開峰して衆生を導くこともでき得たのであるが、神丹は、この坂に生えている千草を調合してつくってあると告げられたところから、これに因んで千種坂或いは草生坂と名付けたものであると・・・ある。「**⑨立山史談**」

・（註：玉殿窟で阿弥陀如来、不動明王に出会った後）次第ニ身体疲れ、是迄角岩木根に軽（転カ）セし疵口益々痛出、起居自由も難成、（中略）此時薬勢仙人爰ニ来り、神丹与へ、服すれハ、皮肉緩て朗らかに、心身悩みを忘ける「**①略縁起**」

この２つの説話では、単に草生坂付近は薬草が豊富で、手当たり次第に採集できる薬草の宝庫というだけではなく、薬効に神仏の霊威を借りた内容になっている。しかも説話によっては、有頼に薬草を教え、神丹を授けるのが「薬師嶽の守護仏」、「薬師嶽の神」であったり「薬勢仙人」であったり、また「熊王権現」であったりと揺れる。これはこの地に薬神の信仰が深く根付いていた訳ではなく、芦峅寺では立山山中で薬草を採取して売ることや、配札の際にはその場所の薬草で作った薬を携え各地で頒布する生業のために説話を利用したことを示唆していると思われる。

薬草との関連では、材木坂の手前辺りに、肩から葉を纏い何かを指し示すように腕を伸ばして立つ人物の描かれている立山曼荼羅が１点だけある[15]。筆者は今まではこれを、口に草をくわえて岩座に座る通常の姿との違いに疑問を持ちつつも、草生坂を象徴して立つ「神農」の姿であろうと考えていた。しかし草生坂に纏わる諸説話を踏まえると、これは純粋な神農と言うよりも、地元で薬と結び付けられていた薬師嶽の神、薬勢仙人などと融合させた「立山の薬神」のイメージとして描れたものと見た方がいいのではないかと考えるようになった。少なくとも立山曼荼羅に姿が描かれていることから、絵解きの中でも草生坂と薬草について語る機会にあったことが窺われる。

明治以降、草生坂の説話が立山信仰の枠を離れてリライトされていく中では鹿が現れず、有頼は神仏から解毒の薬草を教えられるのではなく、草生坂で薬草を食べ空腹を満たしたり、疲労を回復したりするという内容の変化形が見られることは後述する。

２－５　断截坂・かりやす坂の地名譚

禅定道に沿って登る中で、説話の基になったモチーフが可視的に現存している場所には説話は生まれ易いだろう。立山曼荼羅でも視覚的に表現でき、絵解きで語っても理解され易いように思われる。逆に地名として存在していても可視的な特徴に乏しい「黄金坂」、「草生坂」、「かりやす坂」などに纏わる「サブストーリー」は、自然発生的なイメージではなく、有頼の試練とそれを神仏の加護により克服する冒険譚として、後から意図的に基本プロットに組み込まれていったもののように思われる。特に「断截坂」には表記も含めて固定していない点が見られる。

２－５－１　断截坂

「だんさい」坂と呼び慣わされるが、立山縁起諸本や明治以前の説話では明確な有頼開山説話とは言い難い、

表記や内容の揺れが見られる。

①此坂ヲ断材ノ御坂ト申テ我等ガ罪障悉ク断滅スル故ニダンサイノサカト謂テ不断光仏ノ御説法アルナリ又タ此間ニシカリバリの穴ア（リ脱カ）詳クハ三才図会ニ見タリ「**⑤手引草**」

②〇断罪坂「**④三才図会**」

「**④三才図会**」では名称を挙げるのみで、それに続く有頼開山説話ではなくその付近の、立山禅定で女人禁制に関連した「叱尿（しかりばり）」の説話を載せている。富山藩校広徳館学正野崎雅明の紀行文『立山ノ記』（文化９年〈1812〉）では、叱尿について「此ニ至ツテ又十里、路傍ニ一穴アリ。其ノ深キコト測ル可カラズ。又、鬚頭杉（カムロスギ）、大キサ十尺囲ナル者アリ。一々妄説ヲ為ス。蓋シ流俗ノ附会ナリ」と記している。「一々妄説ヲ為ス。蓋シ流俗ノ附会ナリ」と、仲語が語った内容は怪しげなこじつけと断じているが、同時にそれは確かに仲語が途中でそのような説話を語って聞かせていたことの傍証となろう。

「叱尿」の説話は、「有頼開山説話」ではなく女人禁制説話の中で、止宇呂尼の供をして登山する童女が立山神の怒りで杉にされた侍女を見て怯えて足を止めたのを、止宇呂尼が放尿しながら叱ったため、或いは童女が怯えて失禁したために大地に大きな穴が開いたとする。

しかし「**⑧伝承説話**」では、

止宇呂尼随身の童女がこの急坂を罪の深さを断ずる所と聞いて、打ち戦き能く登らないので、尼が大声で叱りつけたので童女は益々驚き悲しみ、思わず小水を漏らしたところが、山神の怒りをかい、山道の真中に深い穴があき、叱られていばりをしたので「しかりばり」という

とある。童女は、「そこで自分の罪深さが罰せられる」と怯えたことが「断罪坂」の地名譚になったことを示唆する。この①と②を総合すると、最も早い時期の「**④三才図会**」では説話の内容が定まっておらず、「断罪坂」で止宇呂尼が童女を叱った説話を原型として、そこから「だんざい坂」と「叱尿」の説話に分化して伝承していったと思われる。ただ断罪について①では滅罪の意、②では罪を裁く意と、異なった解釈が併存する。更に、明治以降には「有頼が雷獣を截って成敗した場所」とするストーリーも見られ、更に異なる解釈の生じていたことが分かる。

現在「断截」の文字を見れば、そこが「獣を截った（成敗した）場所」とイメージし易い。管見した資料を見る限り、この説話は他の「サブストーリー」に比べて表記や解釈が多岐に亘ることから見て、かなり後になってから、複数の仲語の解説などを基にして挿入されたものであろうと思われる。そして、明治以降のリライト作品で雷獣の話が採られているのは、「有頼が雷獣を倒して先へ進む」という冒険譚の要素が、有頼の英雄像とも合致して定着していたため、拡散し易かったからではないかと思われる。

２－５－２　かりやす坂

かりやす坂の説話は絵解きで語られる機会が少なかったのか、立山縁起諸本に見える内容は僅かである。これも「だんさい」坂と同様に、明治以降のリライト作品になって具体的に書かれているものが目立つ。

①此ノ地大雷震ス、奇童云ク、七重勝妙滝也、雖レトモ然リ箇々法性寂然タラハ何ソ有ニ障碍一、可レシ安二心身一ヲ［加里屋須坂是也／以レ案ヲ俗言二加里屋須一ト］「**③縁起**」

②自ラ諸悪莫作ノ心口発テ心身共ニ受二テ勝妙ノ楽ヲ登一ルル故ニ此ノ坂ヲカリヤス坂ト謂ナリ「**⑤手引草**」

立山曼荼羅にはこの場所を具体的に描いた画像は見当らない。言葉のみで語ったとしても聴衆は具体的なイメージが持ちにくいため、絵解きよりもむしろ禅定登拝者が現地に立ち、滝の音と共に仲語の話を聞いた方が実感できた説話ではないかと思われる。

①の「此ノ地大雷震ス」とは称名滝が落下する轟音だが、それを「**③縁起**」では、悟りの本質は心静かであり、それを気にかけずに心身安らかに坂を登ることができる意に解釈されているようである。

富山藩士で歌人の佐藤月窓は、寛政10年（1798）に立山へ登った際の紀行文『立山紀行』の中で、「かりやす」（軽快に登りやすい）というのに実際は非常にきつい坂で立腹したとして、「いく程もあらで、鼻つくばかりさがしければ、彼の滝みしおもひにはようかはりて、汗は中々滝のごとし。名をとへばかるやす坂といふ。いと腹あしき名なりとて／藤かつらとりつく道のくるしきをかりやす坂と何名つけけん」と記している。「いと腹あしき名なり」とは諧謔だが、これも現地で仲語がこのような説話を語って聞かせていたことが分かる好例である。そのような仲語の話が明治以後に採話されて拡散した説話ではないかと思われる。

２－６　江戸時代までに伝承していた「サブストーリー」分析の小括

以上見てきたように、禅定道には多岐に亘る「サブストーリー」が挿入されている。衆徒や仲語たちは実際の絵解きや名所解説の中では、その場で使い分けることができる複数の話を用意していたのであろう。そして基本プロットに様々な説話が挿入され膨らんでいったのは、「絵解き」が各宿坊で縁起を基に潤色され布教勧進のための語り物として口承する中で、細部が変化していったためでもあろう。

説話の成立を時系列で並べることは難しいが、前の話が消えて後の話に置き換わっていくということではなく、代々の話者が新しい「サブストーリー」を生み、坊家間の情報交換によって共有して伝承された部分はあるだろう。それぞれの宿坊家に伝わる立山曼荼羅の構図や依拠した縁起にも細部に揺れがあり、また何年も仲語として禅定登拝者の案内に慣れてくれば、その場でアドリブを盛るのも自然な成り行きであろう。細部の名称や数字、内容の順序に齟齬が見られるのは口承では想定の内としても、それらの話を聞いた登拝者が在地へ戻り、土産話として再話して各地に伝えられることも考えれば、揺れの幅は語る人の数だけあってもおかしくはない。

開祖有頼の存在については、立山が霊山であることを象徴する意味で、芦峅寺も岩峅寺も有頼を開山者にふさわしい人物像として共通認識を持って語られてきたと思われる。また「サブストーリー」の中では登山の途中で遭遇する神仏や動物のバリエーションは多岐に亘るが、それらは有頼を助けるだけではなく、逆に試練を与える立場にもなっている。結果としてそれは語り物に冒険譚の要素を盛り込んで聴衆を惹き込むと共に、困難を経て立山を開く目的に到達した有頼の英雄像に繋げられてもいる。

また、「サブストーリー」には芦峅寺、岩峅寺双方の布教形態や宗教的な利権、山中での権限の違いが反映していたものと考えられる。それは曼荼羅の構図・絵柄にも反映しているが、立山信仰の継承を生業とする中での護符等の頒布、檀那場回りや出開帳での勧進活動に資するものであった。

芦峅寺や岩峅寺では歴史的な経緯、立地などから、共通する説話だけではなく、布教活動に結び付けるため意図的にそれぞれに異なった形の説話が生まれていた。芦峅寺では慈興上人坐像を祀り、開山以後芦峅寺に住み 83歳で示寂するまでの説話を伝え、辞世の歌や立山開山廟を祀ることから、岩峅寺に比べて有頼との結び付きは色濃いもののように見える。

３．明治以降の採話、リライトによる「サブストーリー」の拡散とその背景

現在伝えられる説話の多くは、明治初め頃までに宿坊で語り継がれてきた話を、直接或いは伝え聞いた記憶からの採話と考えられる。

「有頼開山説話」を立山縁起に基づく宗教的な立場から見たとき、様々な「サブストーリー」が付加された動機は二つあったと考えられる。一つは、芦峅寺や岩峅寺の衆徒たちが、開祖である有頼を偉大な存在として強調することで、立山の霊山としての権威や格式を強調するためであったと思われること。またもう一つは、絵解きを通した布教勧進で各地から立山禅定登山へ人を誘うための「語り物」の要素を持つことである。後者が、明治以降のリライト作品では冒険談として立山山中で数々の試練や困難に打ち克つ英雄としての有頼像を形成していく。それは有頼が立山を開くという宗教的な偉大さよりも、有頼自身が神仏の加護を

受けるにふさわしい勇気や誠実さを持つ少年の象徴として肉付けされていくことに表れる。

そのような明治以降のリライト作品は、長文のものや編集上ダイジェストにしたものなど様々である。またその作者は、小論で資料としたものに限っても児童文学者、郷土史家、教員など15名を超える。

子供向けにリライトした作品は、敬体を用い平易な言葉遣いを心がけ、作者の解釈で内容を咀嚼して創作されている。主人公としての有頼に人格を与え、白鷹を探す途中で遭遇する神仏の描写や会話の台詞回しにオリジナリティーを加えるなど、娯楽性を高めるとともに、教育的な配慮を意識したようである。そして、そんな有頼は神仏から開山を託された「英雄勇者」であること、「選ばれた人」であり、立山を開くにふさわしい人物であったことを、「サブストーリー」を通して証明するような展開の読み取れるものが多い。明治以降「サブストーリー」には、困難を自力と神仏の助けによって乗り越えて成長する冒険談、英雄譚としての価値を見出した有頼観の転換があり[16]、その端緒が冷光の童話創作にあったと見られることは、次節に後述する。

小論では、管見できた次の27点を資料として内容の比較と考察を行った（表２参照）。これらには、必ずしもストーリー性のある物語に限らず、登山案内書の中に見える登山道に沿った「サブストーリー」の紹介も含む。また資料の番号は刊行年順である。

なお、以下それぞれの資料から本文を引用した際は出典を示すため文末に資料番号を示した。また資料名が本文中に複数回表れる場合は、２回目以降は資料番号のみを示した。

【資料１】浅地倫『立山権現』（中田書店、明治36年〈1903〉）
【資料２】大井冷光『立山案内』（清明堂書店、明治41年〈1908〉）
【資料３】大井冷光「佐伯有頼」（『越中お伽噺 第二編』所収、清明堂書店、明治 42 年〈1909〉）
【資料４】大井冷光『立山昔話』（有頼会、大正４年〈1915〉）
【資料５】立山登山会『立山』（『立山案内』）（立山登山会・雄山神社社務所、大正４年〈1915〉）
【資料６】高見清平『最新越中立山案内』（高見活版所、大正７年〈1918〉）
【資料７】小柴直矩『立山案内記』（高見活版所、大正７年〈1918〉）
【資料８】大井冷光「白い鷹」（『母のお伽噺 プリムラの巻』所収、ヨウネン社、大正９年〈1920〉）
【資料９】吉澤庄作『立山遊覧』（中田書店、大正11年〈1922〉）
【資料10】吉澤庄作『立山』（北陸出版社、大正14年〈1925〉）
【資料11】小柴直矩「立山の史蹟伝説」（『史蹟名勝天然記念物調査報告　第九号』所収、富山県学務部、昭和２年〈1927〉）
【資料12】青木純二「白鷹（立山）」（『山の伝説 日本アルプス篇』所収、丁未出版社、昭和５年〈1930〉）
【資料13】「高志の白鷹 佐伯有頼公」（富山女子師範附属小学校編『高志の白鷹』所収、富山女子師範附属小学校、昭和９年〈1934〉）
【資料14】池上秀雄『立山千夜一夜』（中田書店、昭和22年〈1947〉）
【資料15】岩佐虎一郎「霊山立山を開いた有頼」（『越中いまはむかし』所収、越中史話会、昭和31年〈1956〉）
【資料16】野島好二「立山の伝説 白鷹の行くえ」（『立山のはなし』所収、北日本文化協会、昭和32年〈1957〉）
【資料17】小柴直矩「立山の開山」（『越中伝説集』所収、富山県郷土史会、昭和34年〈1959〉）
【資料18】稗田菫平「白鷹を追う少年」（『立山のてんぐ』所収、北国出版社、昭和46年〈1971〉）
【資料19】石崎直義「自然伝説 立山開山」（『越中の伝説』所収、第一法規、昭和51年〈1976〉）
【資料20】富山伝説散歩「立山開山・佐伯有頼」（石崎直義・大島広志・辺見じゅん編『日本の伝説 24 富山の伝説』所収、角川書店、昭和52年〈1977〉）
【資料21】「立山開山」（立山民話研究会企画『立山の民話』所収、立山黒部貫光・立山貫光ターミナル、昭和52年〈1977〉）
【資料22】高島昇一他「白タカとクマと立山」（『立山町の歴史物語』所収、立山町教育センター、昭和

56年〈1981〉）

【資料23】担当：長田陶吉「有頼少年と白タカ―立山開山―」（富山県児童文学研究会編『富山の伝説』所収、日本標準、昭和56年〈1981〉）

【資料24】担当：伊藤曙覧「有頼の立山びらき」（福田晃編『日本伝説大系 第６巻 北陸編』所収、みずうみ書房、昭和62年〈1987〉）

【資料25】石黒渼子「立山開山の話」（『富山の伝説』所収、桂書房、平成５年〈1993〉）

【資料26】遠藤和子監修「立山を開いた有頼少年」（『立山と黒部の昔ばなし』所収、立山黒部貫光、平成11年〈1999〉）

【資料27】稗田菫平編「立山をひらいた少年有頼」（『語りつぐ富山の民話』所収、富山県児童文学協会、平成14年〈2002〉）

３－１　後年に影響を与えた初期のリライト作品

（１）【資料１】『立山権現』

『立山権現』は、浅地倫が明治36年（1903）に立山へ登った時の紀行文に立山の紹介を加えたもので、立山の案内書としては最初のものとされる[17]。書名を「立山権現」としているように、先ず立山を霊山としてとらえ、縁起の引用から書き起こし、山中で仲語らが語った途中の名所に纏わる説話も収載している。この点から、立山案内書としてだけではなく立山に伝わる説話の最初期の採話と見られる。単なる登山記に止まらず、縁起に始まる信仰の歴史を踏まえていることは、重要な意味がある。この後に刊行される立山の登山案内書でも人文的な視点の記述が決して登山の添え物ではなく、純粋な信仰登山ではなくとも、山に登ることに敬虔な意識を持ちその歴史や宗教性を尊重する意味が踏襲されていくからである。同書末尾に載せた当時の県内新聞の批評を引用すると、刊行時から既にその価値が評価されていたことが分かる。

・昨夏単身登山を試みたるときの紀行に古来の伝説をも加え、最も詳細に最も精密に本邦の名山を紹介したり、為に一読座ながら同山を跋渉するの想ひあらしむると共に同山を探険せんとするものの栞とするに適せり（「北陸政論」）

・立山各地に於ける形勝は云ふに及ばず、坊主的の縁起神秘的の怪説に至るまで悉く之を網羅し、行文また流麗にして一読するに足る（「北陸新報」）

本書に載せられた「立山権現の由来」は、「藤橋の渡河」、「草生坂」の内容から見ると岩峅寺に伝わる説話を基にしていることが分かる。そして後年の刊行物には、『立山権現』での解釈や「サブストーリー」の描写表現をほぼそのまま引いてリライトが繰り返されていった部分がある。

そこで、本書の特徴的な部分を挙げ、後年のリライト作品と比較するためのポイントを示しておく。

○遭遇した、白鷹の行方を教える神仏の風体

・垢じみたる布子を纏ひ、Ⓐ銀線を束ねたらんが如き髪を長く垂れて童然たる禿頭隆く起きⒷ炯然たる眼球深く窪み言語動作また頗る倨傲なるⒸ一老翁

〈ポイント〉特徴的な点（下線Ⓐ～Ⓒ）は、①長く垂れた銀線を束ねたような髪、②炯然たる眼、倨傲な言動、③名前が無く「一老人」の３点である。

このような具体的な描写は、それまで文字に残されることはなかったと思われるが、浅地が創作したものではなく、絵解きや仲語たちの口伝の中で形成されてきたキャラクターを採話したものであろう。

○藤橋渡河・黄金坂・草生坂

・金色の猛猪現はれ、卿を負うて渓流を渡れり、卿漸くにして彼岸に達し心怪みながら後を顧み給ふに

猛猪何時しか消えて姿を隠しぬ。

・（註：草生）坂を攀登らんとし給ひしに腹飢を訴て進み難し、止むなくその辺に茂れる草を摘みて嘗め給ひしかは味食ふへくして忽ち満腹したり、今此処を草生坂となんいへり。

〈ポイント〉内容を整理すると、①現れたのは「金色の猪」。②川を渡した後、猪はいつの間にか姿を隠した。③有頼は空腹のため草を口に入れる。食べられる味で、空腹は満たされたという点である。

前述のように、本来は「獅子」であったものが口伝の中で変化し、幕末からは明治期には「猪」の解釈の方が一般的になったとすれば、それを採話し最初に文字化された時点で、以後はそれが一般化したようである。また、有頼が草を口にした理由についても採話の時点で、芦峅寺に伝わる「鹿の毒気」に対して神から解毒の薬草を教えられるのではなく、疲労や空腹が理由となり食草は自分から口にする形に文字化され、一般化したようである。

○断截坂

・忽ち一団の妖雲路に現れ出てゝ咫尺弁し難く篠衝く強雨地に溢れて歩む能はず、果ては雷鳴轟き電光閃きて巌石をも砕く勢ひに卿頗る困しみ、遂に腰に帯へる一刀を抜き放ちて雷獣を斬り給ひければ、雲去り雨止みて天地再び晴れたり、今此処を断截坂と云ふ

〈ポイント〉この説話のプロットは５点ある。①怪しい雲がわき、大雨になる。②雷鳴と閃光。現れたのは雷獣。③刀でその雷獣を殺す。④雲は消え雨が止んで再び晴れる。⑤その場所が、突然現れた雷獣の襲来の際に雷獣を斬った所。

前述のように「**⑤手引草**」では「罪や障害をことごとく断ち滅ぼす坂」、また「**⑧伝承説話**」では「罪の深さを断ずる所」と解釈にやや違いが見られたが、採話時点では更に別のバリエーションを整理して文字化したものが、一般化したようである。

○仮安坂

・忽ち声あり遠雷の轟くに似たりと雖も漠乎として其由りて来る所を知る能はざるを恨む、是ぞ即ち称名滝の瀑声なる、仲語云くこの坂にて人語を発せば滝壺より竜蛇来りて呑み去ると、例の府会の説ながら四辺の景色何となく物凄くして身の毛逆立つを覚ゆ、之れを仮安坂と云ふ

〈ポイント〉「**③縁起**」では、「称名滝の落下音は轟音ではあるが、悟りの本質は心静かで心身安らかに坂を登れる」という解釈による地名としていたが、ここでは「かりやす」に「仮安」の文字を宛て、轟音は聞こえるが滝の姿は見えないことを述べるに止め、「サブストーリー」は記していない。表記には「刈安」の文字を宛てているものもある。また下線部を見ると、仲語は通常から文字に残されていないような話を適宜登山者に応じて語っていたようである。

（２）【資料２】『立山案内』、【資料３】「佐伯有頼」、【資料４】『立山昔話』、【資料８】「白い鷹」

明治以降、「有頼開山説話」は家庭内で親から子へ語り聞かせる他、立山に纏わる伝説の一つとして採話され、童話や昔話として潤色したものが広く読まれることで[18]拡散したと思われる。

これには、個人的にも立山に深い思い入れを持って育った大井冷光が先駆的な役割を果していた。冷光は明治42年（1909）には、越中に伝わる伝承を基に創作した童話集『越中お伽噺 第二編』を刊行しているが、その中に「有頼開山説話」をリライトした作品**【資料３】**「佐伯有頼」を発表している。後年、特に児童向けにリライトされた「有頼開山説話」の多くがこれを含めた冷光の作品の影響を受けており、その後何人もの筆によって少しずつ表現を改めながら繰り返して刊行され、現在も読み継がれている。

そのような、冷光の解釈による「有頼開山説話」が読み継がれてきたのは、その描写や表現力の優れていたこともあるが、そこには有頼の行動の意味付けを変えたストーリーの潤色があったからではないかと考えられる。

近世立山信仰での立山曼荼羅を用いた布教では、立山曼荼羅を目の前にして絵解きを聴く人々は、有頼が逃がした白鷹を追い立山登拝道をたどりながら立山信仰の聖地である玉殿窟を目指すストーリーによって疑似登山する。聴衆は、それを通して有頼の行動と共感しながら、救いに向けた罪滅ぼしの方途とその必要性へ導かれる[19]、とする見方がなされる。これを、絵解きの中で有頼が果たした役割であったと考えるならば、明治になって開山の説話が立山信仰の枠を外れ童話にリライトされた際に、有頼の存在は立山の開山に尽くした有徳の高僧から、困難を克服し仏から開山の大命を受けるに相応しい勇士へとメインとなるキャラクターの転換があったと考えられる。

当然ながら、立山開山に対して有頼が成し遂げた大業というのは、熊を追って険しい山を登ったことではなく、救済を求める人々のために、出家して立山を開いたことだったはずである。だから布教の際の絵解きでは、既に立山は有頼によって開山されていたということは所与の前提とし、出家後に開山のために行った具体的な行為はほとんど出てこない。しかし冷光はリライトする中で、有頼が立山を開山した偉大な開祖というよりも、神仏の加護を受け度重なる試練を克服する、あたかも神話に登場する建国の英雄のような存在として描き、それを補強する形で「サブストーリー」を挿入している。

そして冷光以降の「有頼開山説話」は、ほとんどが冷光の目を通して確立した、そんな有頼観を下敷きにして更にリライトされていく。これによって「有頼開山説話」から宗教的な要素を捨象しながら、冒険譚としての「サブストーリー」や、立山に対する富山の風土的な思いが綯い交ぜになった模範的な少年像として有頼を偶像化していった訳である。

その動機にも関連する、冷光の立山観や創作活動に見られる立山への愛着の強さについては、廣瀬誠氏がその出自や幼年期に母の影響があったことなどを指摘している[20]。

そこで、これを承けた具体的な事例を二つ挙げる。

一つは**【資料２】**『立山案内』の執筆である。動機として執筆の前年（明治40年〈1907〉）にようやく立山へ登った感動が大きかったことは、その自序に「余を育て給ひし母君、祖母君は、常に余が立山参詣の日の、一日も早かれと、祈り給ひしが、あはれ、其を見給はで、逝きましぬ。（中略）昨年の夏に至り、初めて、余は立山登躋を、果すことを得たり。然るに、其後余の立山に対する趣味は、いや増し深きものあり、専業の余暇に立山を観察し研究せんとて蒐集したるものは、遂にこの小冊子を作せり」と書いていることからも察せられる。自序には「専業の余暇に立山を観察し研究せんとて蒐集したるもの」とあるが、その情報量は多分野にわたる膨大なもので、動植物、鉱物、気象など科学的な記述と立山開山関連や伝承、詩歌など人文的な内容を含む。廣瀬誠氏はこれを「立山万般にわたる総合的著述であった。その意味では最初の立山研究書」と評している[21]。

そこで**【資料２】**に見える「サブストーリー」から冷光以降のリライト作品と比較するための特徴的な部分を挙げ、そのためのポイントを示しておく。

○藤橋渡河・黄金坂・草生坂

・有頼卿熊を追ひて、此処に来りしに、黄金色をなせる猪現はれ卿を背に乗せて川を渡せしが、直ちに此の坂にて、姿を隠したり、と云ひ伝ふ、因つて黄金坂と称す。（中略）其れよりは草生坂と云ふ、名の由来は有頼飢えて草を食せし所なりと

〈ポイント〉現れたのは「黄金色の猪」で、川を渡した後猪は姿を隠した。有頼は空腹のため草生坂の草を食べた、という点は**【資料１】**の記載と一致する。冷光は、初めての立山登山に際し『立山権現』を閲覧し、引用した可能性がある。

○断截坂

・有頼雷獣を退治せし処とて、断截坂といふ

〈ポイント〉ここも【資料１】と同様、雷獣の登場と退散を元にした地名譚にしている。

○仮安坂

・此度は恰も平板を立てし如き至難なる急坂あり、但し僅か計りの間なり、之を仮安坂といひ、遙かに鞳々たる称名ケ滝の瀑声を聞くを得べし、（中略）有頼卿仮安坂に差蒐りて、彼の瀑声を、念仏の声の如く美妙なりと喜び、やすやすと坂を超え来て、此処（註：伏し拝み）に滝を拝みしとなり

〈ポイント〉仮安を「やすやすと越える」意で解釈しており、登山の際に現地で仲語などから聞いた話が基になった可能性があるだろう。

もう一つは、童話作家として非常に早い時期に「有頼開山説話」をリライトした童話【資料３】を執筆している点である。立山開山をモチーフにした文学性豊かな創作童話の刊行が「有頼開山説話」の拡散に大きな役割を果たしたのは間違いないだろう。執筆の動機には、新聞記者を続けながら児童文学や教育活動に関心が高かったことに加えて、明治末から大正にかけて、日本での児童文学の成立や口演童話の運動に尽力した久留島武彦に接し、巌谷小波たちの活動に参加したことが大きい。初版発行時の「佐伯有頼」の仮名表記には巌谷が提唱した「発音式仮名遣い（お伽仮名）」を用い、総ルビにしていることもその影響を受けて口演童話を意識したものと考えられる。

そしてそのような童話の内容が受け入れられたことには、富山で組織的に行われていた成人儀礼的な立山登山の風習や、明治末頃には始まっていた学校登山との関連も大きいだろう。但し、富山での成人儀礼的な立山登山は江戸時代からあった習俗と言われているが、行われた地域や規模、歴史的な経緯についてはまだ研究の余地がある[22]。

冷光以降にリライトされた童話作品を並べてみると、そこには冷光の童話をベースに英雄として偶像化した有頼の姿に教育的、修身的なメッセージを滑り込ませているように見える。それによって親や年長者への敬意、親孝行、勇気、克己心などの徳目を読み取り「有頼少年のような立派な子供になりたい、なってほしい」といった形で読まれていたとすれば、冷光の童話作品がそれ以降のリライトを方向付けたとも言えるだろう。冷光以降の作品は一般的な「有頼開山説話」のリライトと言うより、有頼をモチーフとした冷光の童話のリライト作品とも言えるように思われるが、そこには冷光の有頼観を基に、有頼を富山の子供の模範的な姿とし、その精神に学ぶようにとの願いがあったのであろう。

大正４年（1915）「越中の代表的名山たる立山開山者佐伯有頼卿の伝説を一般に普及せしめ、以て児童社会教育上資益あらしめたい目的」で「有頼会」が設立された。これは前述のような冷光の「有頼開山説話」に対する考え方を端的に表すものであろう。また会の事業として有頼卿の銅像を建設することを謳い建設基金を募るが、その際「金五銭宛寄附なさる小学児童に限り一部宛配布いたします」として「有頼開山説話」を基にした一作品のみ載せた20頁ほどの小冊子【資料４】『立山昔話』を作成した。

当初その内容は【資料３】を再録したものと思っていたが、実際は言葉遣いや内容を部分的に書き換えて改稿した別作品であった。内容の比較については後述する。

【資料４】の冒頭には「有頼会」の設立を記した後「この『立山昔話』の編述に関しては掌典佐伯有義氏の助言及校閲を受けました。」とある。岩峅寺永泉坊に生まれた神道学者佐伯有義が内容に目を通していたのであれば、当然岩峅寺に伝わる説話に基づく校閲[23]であったものと考えられる。【資料３】も岩峅寺に伝わる説話を下敷きにした内容だが、【資料４】では【資料３】には書かれていた草生坂の部分が全文削除されている。これが佐伯有義の校閲の結果によるものか否かは不明だが、この違いは、以降の冷光作品のリライトを特定する際に参考となった。

それだけではなく冷光は、「有頼開山説話」を基にした童話を、思い入れを持って納得がいくように発表順に【資料３】、【資料４】、【資料８】「白い鷹」の３回改稿して発表している。改稿の理由を示すものは残

されていないが、冷光の創作過程と思想にも触れつつ、それぞれに特徴的な内容や描写部分を抽出し、後年のリライト作品の表現と比較する際のポイントを示しておく。

先ず【資料３】では多用されていた有頼の会話文には､後には削除されている部分が多い。また【資料３】は富山での刊行であったが､【資料８】は東京で刊行されたものだったためか、富山の地理風土が分からない読者を想定したような、説明が必要な背景的内容を加筆する一方、宗教的な部分は更に割愛している。

○有頼の体格、特技

・この有頼わ大層体質の強い児で、何時も勇しい遊びをする事が好きでした【資料３】
・年齢に似あはぬ大きな体格で、人並みはづれた力を持ち、ことに矢を射ることが上手で、いつも勇ましい遊びばかりして居りました【資料４】
・体格といひ智恵といひ、人並み優れて立派な方でございました【資料８】

〈ポイント〉【資料３】､【資料４】の描写は、後に熊を矢で射ることの伏線になる。しかし【資料８】では、後述のように熊を弓矢ではなく剣で刺したことになっているので、伏線は外されている。

○全編で、有頼は父有若を何と呼ぶか

・お父さん、父【資料３】　・お父様、父上【資料４】　・お父様【資料８】

〈ポイント〉【資料３】､【資料４】には揺れている部分があるが、童話を読む児童への教育的な配慮を加えたためか、後になる程丁寧な表現に代えていったようである。

○逃げ去った白鷹の形容

・あんな立派な鷹【資料３】　・世に珍しい芽出度い鷹【資料４】　・あの芽出度い鷹【資料８】

〈ポイント〉【資料３】にはないが､【資料４】､【資料８】で「芽出度い鷹」とするのは、有若が白鷹を入手した際に、白鷹の出現は国にとっての奇瑞と喜んでいたという伏線がある。

○鷹を逃がした過失に対する、父有若への自責の念

・「全く私が油断して居たせいですから、お父さん、どうか勘弁してください」【資料３】
・若しこの為めにお気分が悪くなり、お勤めの上に障るやうなことがあつては大変である【資料４】
・若しあの鳥が逃げたために国を治めになるお父様のお体に災難がおこるやうでは相済まない【資料８】

〈ポイント〉【資料３】では謝罪しているが､飽くまでも父親に対する個人的なものである。それに対して【資料４】､【資料８】では、国にとっての奇瑞である白鷹を失うことで国の安定が脅かされることを懸念する心情が描かれる。自責の念は、父への個人的な謝罪から国司である父の職務遂行への影響や心配を含むものへと変化している。

○白鷹の行方を教える神の風体

・妙な格構(ママ)をした一人の老人が、出てきました。銀の針金の様な長い髪を下げて、眼をギラゝさして、如何にも恐ろしそうな人【資料３】
・銀の針金の様な長い鬚の生えた、気高い老人で、ギラゝした眼で有頼を見て居ました【資料４】
・髪も髭も銀の色をした気高いお爺さんが現はれました。【資料８】

〈ポイント〉【資料１】で浅地倫が具体的に視覚化した仙人然とした風体を踏襲し、品格は妙な格好の老人から気品ある老人へと変化している。「①**縁起**」などでは白鷹の行方を教えた後で自ら「刀尾天神」と名乗るが、ここでは何れも神の名前は書かれず、必要以上の宗教的な部分を削除する意図があったと思われる。

○一度見つけた白鷹を手元に呼び寄せようとする方法

・早速腰から甘い餌を取出し、それを鷹に見せ乍ら、「鷹こォい鷹来い、餌をやろ、おいしいおいしい、餌をやろ。」と幾度も呼びます【資料３】

・腰から呼子の笛を出して口にあてますと、細い優しい鈴を振るような音で、それを吹きました【資料４】

・腰から鈴を取り出しますと、静かにそれをうち振りました【資料８】

〈ポイント〉縁起には「鈴」を振って呼び寄せるものが散見される。冷光の解釈では「呼びかけ」→「笛」→「鈴」と変化が見られる。【資料３】はこの部分以外にも有頼の台詞が多用されており、初期には　口演童話として語り物の要素が強いように思われる。それ以降【資料４】、【資料８】は読み物としての描写を意識して改稿したようである。

○麓での熊との遭遇

・矢庭に一匹の黒熊が飛び出して爪を鳴らして有頼や鷹に喰つてかかゝる（衍カ）ものですら（か脱カ）（中略）、『おのれ免して置くものか！』と、持つて居た弓に、手速く矢を番い、其黒熊を目掛けて放ちますと、狙え外れずグサと熊の胸の処え当りました【資料３】

・不意にあらはれましたのは一匹の大きな熊であります。有頼目がけて爪を鳴らして襲ひかゝらうといたします（中略）「コラ無礼者ッ。」と有頼は、持つてゐました大弓に矢を番へて、その熊の胸元目がけて射付けました。狙ひ外れず月の輪にグサと刺さりますと、さすがの熊もタヂタヂとなりましたが、有頼続いて二の矢を番へるのを見ると、あわてゝ逃げ出しました。【資料４】

・忽ち恐ろしい勢ひで飛び出して来て、この白い鷹を捕らうといたしました。（中略）有頼は地団太ふんでくやしがりました。「無礼者ッ」といひさま熊に立ち向ひ、さしてゐた剣をひきぬくとその胸元の月の輪を突き刺しました。【資料８】

〈ポイント〉下線部を比較すると熊の襲い掛かる対象が「有頼や鷹」→「有頼」→「白い鷹」と変化しているのが分かる。立山縁起諸本や【資料１】には、このような対象の具体的な描写は見られない。これは冷光がリアルな場面をイメージし、改稿の度に襲った対象を先鋭化させて創作した部分である。【資料８】では自らが襲われる危険の回避からではなく、大切な白鷹を襲おうとした熊への怒りの展開が鮮明になっている。また【資料８】では、弓矢ではなく剣で熊を刺したことに改めた点が特徴的である。

○藤橋渡河・黄金坂での猪と有頼

・一匹の金の光を放つた猪が出て来ました、「オヤゝ今度わ金の猪か、妙なものが出て来たな」と有頼わ弓を取り直して、撃ち殺そうとしますと、この猪わ先刻の熊とわ違い、誠に馴れゝしく有頼の前に来て、背を出し、「サア私が負つて上げませう。」と云う様にしますから（中略）向こう岸に有頼を置き、又すぐに何処かえ行つてしまいました【資料３】

・忽ちあたりがキラキラとして黄金色の毛皮をした一匹の猪が有頼の前に出て来ました。「こいつ又手むかうといふのか。」と、有頼は弓を取り直して構へますと、猪は前の熊とはうつてかはつて、いかにも馴々しく静かに有頼に背を見せまして「さアお乗りなさい、川は私がおわたしいたしませう。」といひさうにいたしますから（中略）彼岸に有頼を下したと見ると、そのまゝ有頼がまだお礼もいはぬ中にフイと姿をかくしてしまひました。【資料４】

・忽ちあたりがきらゝして、有頼の前に金色の猪が跳び出しました。金の猪は有頼の驚くまへまで来ますと、馴々しく背中を出しました。「さアお乗りなさい、私が川を渡しませう」というふうに見えます、（中略）猪はやすやすと川を渡してくれましたが、そのまゝ姿をかくしました。【資料８】

〈ポイント〉猪の出現に対する有頼の対応と猪の様子の描写では何れも、①猪が突然に現れる、②猪は喋らないが有頼を背に誘う。③渡し終わったら自ら去る、と共通する。また猪の態度を「馴れ馴れしい」とした

描写も共通する。【資料３】と【資料４】では当初有頼は猪の出現を敵視し弓を構えるが、【資料８】では敵視する描写が削られているのは、何らかの意図があったのかもしれない。

○草生坂の記述

・有頼わお腹が透いて来ましたので、手当り次第に草木の葉を拷つて喰べますと、それが又大変美味しく、忽ち満腹が張りましたから、大に元気を盛り返して進みました【資料３】

【資料４】、【資料８】には草生坂の記述はない。

〈ポイント〉【資料２】、【資料３】では、草生坂で草を食べて空腹を満たすストーリーを書いているが、その後の改稿でこの話を削除している点は、単に紙面に合わせた割愛なのか、意図的なものか不明。

○断截坂で遭遇する獣

・やがて暗の中から怪しい獣が一匹飛び出しました。「おのれ何故こんなに邪魔をするか 、免しておけぬ。」と刀を抜き放つてその獣を切り殺します【資料３】

・闇の中を飛び廻る奇妙な獣が、しきりと有頼の行手を邪魔しさうに見えましたので、有頼は矢庭に腰刀を抜いて突き刺しますと、その獣はキヤツと叫んで姿をかくしてしまひました【資料４】

・その時妙な一匹の獣が跳び出して来ましたので、有頼は身をかはして剣で一突きにいたしました、獣がキヤツと叫んで逃げかくれた【資料８】

〈ポイント〉【資料３】では刀で切り殺す。しかし【資料４】、【資料８】では刀で刺すが、とどめを刺したとは書かれていない。童話として、敢えて殺すという刺激的な言葉を避け、成敗する、駆除するなど同様に、婉曲な表現に書き換えていったように見える。

ここは、前述のように近世までの口伝では解釈に揺れがあった内容である。有頼が雷獣を倒して先へ進む「サブストーリー」の初出は、管見した限りは『立山権現』だが、冷光はそれを『立山案内』でも引き、更にそれを基に【資料３】のリライトを行った可能性が高い、有頼が試練を経て立山を登る意味で、冒険譚として重要なエピソードにしたのではないかと思われる。

○カリヤス坂のエピソード

【資料３】、【資料４】、【資料８】何れにも記載がない。

〈ポイント〉冷光は【資料２】ではこの説話を紹介しているが、その後童話にリライトした作品では削除している。冷光のリライトでは、神仏の具体的な名称や宗教色を消す方向性が見られるので、滝の音が念仏に聞こえる宗教的な部分や、試練を経て玉殿窟へ向かう冒険譚的スタンスに照らせば、「念仏を聞いて軽やかに登ることができた」、という内容は意図には合わなかったのかもしれない。

○玉殿窟での遭遇

・有頼は勇み立つてその洞穴え飛び込みますと、これわ驚いた！　逃げ込んだ筈の熊が居ないで、其代わりに美しい、後光を放つた仏様が、それも胸に矢傷を受け乍ら、ニコニコ笑つておいでになるでわありませんか【資料３】

・やがて巌窟の入口に寄りそつて、そつと奥の様子を窺ひますと、闇の中からパツと眼をさすまぶしい光、有頼驚いてよくみれば、熊とはおもひの外の、かうゞしい仏が三体、それも胸に矢傷をうけながら、にこにことお立ちになつて居るではありませんか【資料４】

・やがて洞窟のふちからそつと中を覗いて見ました、すると、その窟の奥からぱつと美しい光がさして来ました。「おゝまぶしい！」有頼は眼をこすりながらよくその光る物を見ますと、まアどうでせう。熊ではなくてかうがうしい仏様がお三方、それも真中の方は胸から血を垂らしながら、にこにこして

おいでになるではありませんか【資料８】
〈ポイント〉玉殿窟で３体の仏に出会うのは、立山縁起諸本にも見られる。但し、血を流す描写には揺れがある。また、何れも遭遇した仏の名前は具体的に書かれていない。

○仏が伝えた開山

・「お前わ速やかにこの山の路を開いてお呉れ」【資料３】
・「有頼其方は世の人々の為めにこの霊山に道を開いて誰にでも山に登られる様にして呉れよ」【資料４】
・「この立山の頂までそなたに道をひらいてもらひたいのぢゃ、道をひらいて仏のいつくしみふかい心を、登る人々にしらせたいのぢゃ」【資料８】

〈ポイント〉冷光が認識した「立山開山」とは、先ず道を作り、人々が立山へ登る手段を整備することであった。有頼が出家する表現はないが、改稿の度にその目的が単なる道の整備ではなく、衆生の救済へと深まっていくようである。

３－２　浅地倫、大井冷光以降のリライト作品の特徴

明治以降刊行された「有頼開山説話」のリライト作品を時系列に並べてみると、初期に採話されたのは岩峅寺に伝わる説話であった。一方、芦峅寺に伝わる説話の刊行は遅く、一般に知られる機会も限られていたようである。
管見した中で、芦峅寺に伝わる「サブストーリー」をそのまま引いた最も古い作品は、昭和32年（1957）の【資料16】「立山の伝説　白鷹のゆくえ」である。また、最も早い時期に芦峅寺に伝わる説話をまとまった形で紹介する「⑥霊峰立山」の刊行は昭和34年（1959）なので、ほぼ同時期に芦峅寺に伝わる説話が刊行されていたことが分かる。しかも【資料16】と「⑥霊峰立山」それぞれが記述する「サブストーリー」を比較してみると、内容や表現はほとんどが一致している。

・そこには沢山の池があり、アシが生いしげった草むらなせる神坐（芦峅）があり、その側に白髪をたれ長い杖を持った三人の老婆が待っていました。（中略）　大きな流れがあって渡ることができないで困っていますと、沢山の山猿がでてきて藤をもつて橋をかけ（藤橋）てくれましたので、それを渡り、しばらくいきますと一頭の黄色の鹿が前をさえぎり、有頼はその毒気に当たって病にかかり倒れました（黄金坂）その時薬師嶽にいます神があらわれて、「汝、倒れるままに手にあたる草を取って食べよ」と告げました。有頼が何かにがい草を口にするとたちまち心がさわやかとなり病気がなおりました（草生坂）【資料16】
・そこには沢山の池があり、アシが生い繁って草むらなせる神坐（芦峅）があり、その側に白髪を垂れ長杖を持った三人の老婆が待っていた。（中略）大きな清流があって渡ることができない。思案にくれていると、沢山の山猿が出てきて、藤をもつて橋を掛けた（藤橋）幸いと喜んで渡り、しばらく行くと一頭の黄金色の鹿が前をさえぎり、有頼はその毒気に当たって病み倒れてしまった（黄金坂）その時、薬師嶽に坐す神が現れて、「汝、倒れたるままに手にあたる草を採りて食べよ」と告げた。有頼が何か苦い草を口に入れると、忽ち心気さわやかとなり病気はなおってしまった。（草生坂）「⑥霊峰立山」

両者は同じ資料を基にしていた可能性が高い[24]。これ以降も芦峅寺に伝わる説話を紹介した文献が限られていることも、芦峅寺に伝わる説話のリライト作品が少ない理由と考えられる。

３－２－１　芦峅寺と岩峅寺に異なる解釈で伝わる説話の比較と拡散

芦峅寺と岩峅寺に異なる解釈で伝承する説話の中で特徴的な部分、〈藤橋→黄金坂→草生坂〉の登山道に

纏わる説話を例に、特徴を分析しておきたい。

（１）藤橋、黄金坂、草生坂に見える猿・猪・鹿の伝承

芦峅寺､岩峅寺それぞれに伝わる内容が合体した説話は見られない。これは口伝する中でも両村の仲語は、登拝者に語る説話ではお互い意識的にそれを避けていたからかもしれない。

例えば、芦峅寺に伝わる説話の中で、猿が現れて藤蔓を編み橋を架ける設定は「藤橋」の語源になっているが、渡河と橋をめぐっては次のような四つの原則パターンが存在する。

（ア）猿と藤蔓はペアで語られる（猿が藤蔓で橋を架けるため)。

（イ）猿と猪が同時に現れる説話はない（渡し役は一つでよいため)。

（ウ）猪と鹿が同時に現れる説話はない（シシの解釈の違いで別々の話になるため)。

（エ）猪が有頼を渡した場合、黄金坂は猪が消えた場所となるが、橋を架ける役の猿と、毒気を出す役の鹿との組み合わせでは、黄金坂は「金色の鹿の出た場所」と設定される。

そして黄金坂は、岩峅寺では猪の消えた場所、また芦峅寺では草生坂は鹿が現れる場所とする原則的なプロットが存在するようである。その上で、草生坂は有頼が口にした草が生える場所として共通するが、そこに生える草には、（Ａ）鹿の毒気の解毒、（Ｂ）空腹を満たす（元気が出る）の二つの役割が設定される。つまり、鹿は毒気を持っており、鹿と草生坂の組み合わせでは（Ａ）となるが、一方の猪には毒気がないので草生坂との組み合わせた場合には、（Ｂ）の役目となる訳である。

（２）芦峅寺に伝わる説話を基にしたリライト作品

明らかに芦峅寺に伝わる説話を採ったリライトと考えられる作品には、**【資料16】**「立山の伝説 白鷹のゆくえ」、**【資料19】**「自然伝説 立山開山」、**【資料22】**「白タカとクマと立山」などがある。また昭和初期の早い時期に､芦峅寺の仲語などが語った記憶を登山者から再話したとものと見られる**【資料12】**「白鷹（立山)」、それらよりも更に潤色によるオリジナル度が高く、芦峅寺の説話に取材した形跡が見られる**【資料14】**『立山千夜一夜』、広く県内の伝説を紹介する中で、立山では芦峅寺大仙坊の佐伯幸長氏から聞き取り取材した**【資料20】**「立山開山・佐伯有頼」などを挙げることができる。何れも、必ずしも「サブストーリー」を皆載せている訳ではなく、作者の解釈や紙面の都合などの理由で割愛されたものがある（表２参照)。

歴史的には岩峅寺に伝わる説話が早くから活字化していたのに比べ、芦峅寺に伝わる別の解釈の説話がまとまった形で刊行物になったのは、前述のように昭和30年代以降と見られる。それ以前に書かれたリライト作品では、個別に芦峅寺旧宿坊家、雄山神社の関係者などから口伝の一部を取材した内容が反映しているものと思われる。

【資料16】では、有頼に開山するよう告げたのを「立山の神」として仏教色を避けている一方で、そこで発する言葉を「われは濁世の衆生を救わんがために十界をこの山に現して山を開けるのを待つていた。この立山は峰に九品の浄土を整へ、谷に一百三十六地獄の形相を現し、因果の理法を歴然と証示している（以下略)」としているのは非常に仏教的で、芦峅寺で佐伯幸長氏に取材した内容を生かしたものと思われる。

【資料19】では玉殿窟で仏に出会うが、「中央に聖観音、右に十一面観音、左に阿弥陀如来、さらに右脇に釈迦如来と薬師如来、左脇に大日如来と不動明王がおわした」としている。矢を受けた聖観音が開山を伝えるのは他には見られない。**【資料22】**の特徴については次項で後述する。

【資料14】は、白鷹の行方を教える老人のキャラクターに冷光以来の描写を踏襲している一方、主人公として有頼のキャラクターを立たせ、現れた熊に対して「オノレ待て、熊の胃(ママ)取つて薬屋に売つてくれる！」など独自のアドリブ的会話を多用して潤色するなど、臨場感を持たせたオリジナリティーに富む。それに続く藤橋、黄金坂、草生坂、断截坂、仮安坂の「サブストーリー」はすべて割愛しているが、結末を「一生をその山にさゝげてその尊い生がいを終えました、その子孫は、今だに芦倉(ママ)に伝え住み、祖先の遺志を守つて

北越の聖地立山の為に尽くし続けています。（中略）小さな堂（うば堂）を造つて其処に住み、人とつき合いも絶つて刻んだという母の木像が今でも子孫の手に伝わつています」と結んでいるところに、芦峅寺での取材の跡が窺える。

また**【資料12】**は、日本アルプス各地の山に伝わる伝承を集めて編集されたものだが、自序には「私は山男たちから、山に住む人々から直接聞いた口碑、古文書などに秘められた口碑をあさつて、こゝに山の伝奇話を集めた。」と書いている。それに従えば、「**①略縁起**」との内容の類似点から、明治～昭和初期にかけて登山の際に芦峅寺の仲語から聞いた話が基になっているようだが、著者が採話した時点で話者の記憶の曖昧さからか、それまで伝わっている内容とは部分的な差異が生じたとも考えられる。具体的な描写部分を挙げると、以下の類似点が見える。

- 白鷹の呼び寄せるため「金の扇で招くと**【資料12】**」と「金扇を上けて招玉ふ「**①略縁起**」の類似。
- 逃げた白鷹の行方を教えるのは、「八十ばかりの老翁が三人**【資料12】**」と「八十余の老人」「**①略縁起**」の類似性。その他「**⑥霊峰立山**」、「**⑦源流と変遷**」に載る、芦峅寺に伝わる３人の老婆が現れて有頼に覚悟を試問する説話との関連。
- 開山後に出家した有頼（慈興）が「自身で弥陀、釈迦、大日に三体を彫んで他の六十六体とともに、姥堂に安置した**【資料12】**」と、「麓の芦峅の里に七堂伽藍を建立し、爰に北方三身の如来、弥陀、大日に三尊を祀る「**①略縁起**」と類似。

特に弥陀、釈迦、大日の３体と他の66体の設定は、媼堂の本尊３体と66体の媼尊の類似から見ても、**【資料12】**には芦峅寺に伝わる説話の強い影響が窺われる。

３－２－２　時代背景

明治以降にリライト作品が作られていく背景には、時代相も反映していたと思われる。

（１）大正期の登山ブームとの関連から

明治末期頃から大正期にかけては、登山者を対象にした立山の登山案内書が短期間に繰り返して刊行されているが、これはその時代の登山人口増加が背景にあると思われる。その要因には、この時代に中流以上の人々が余暇休暇の使い方に登山を選ぶようになったこと。そのために登山者に提供される情報が、新聞や山岳雑誌に多く掲載されるようになったこと。そして山麓まで鉄道が開通し、容易に登山ができる社会的施設の整備されてきたことなどが指摘されている[(25)]。

この時期に刊行された登山案内書の特徴に、登山の行程や交通の他に地形、鉱物や動植物、気象、それに加え「立山と人文」といった項目を立てて、登山道に沿って簡潔に「有頼開山説話」を掲載していることがある。立山登山のルートや登山心得の紹介、地形や博物的な自然の紹介に終始せず、信仰の歴史や縁起、伝説まで掲載するのは、前述のように『立山権現』以来踏襲されることだが、これも禅定登山同様に頂上社殿を目指す登山が多かったためであろう。

そんな中で、立山登山会が立山登山ガイドの冊子**【資料５】**『立山』（大正４年〈1915〉初版）を編集して発行した。この冊子は初版発行後、大正11年（1922）まで５版を重ね[(26)]、広く人気のあったことが窺える。加えて登山ブームの中で立山の情報が求められ、他にも同様の立山登山ガイドの冊子**【資料６】**『最新越中立山案内』（大正７年〈1918〉）、**【資料７】**『立山案内記』（大正７年）が刊行された。そこに載せられる「サブストーリー」は、「有頼開山説話」の基本プロットの中ではなく登山道に沿った随所に纏わる参考情報として載せられているものである。

○藤橋・黄金坂・草生坂

- 往古は藤蔓を以て架けたりし故此名あり　橋を渡りて忽ち嶄巖崎嶇の険阪あり　有頼卿熊を追ひて此

処に来たりしに黄金色の猪現れ卿を背に乗せて川を渡せしが直ちに此地にて姿を失せたりと云ひ伝ふ、因つて黄金阪と称す、それより草生坂に至る、名の由来は有頼卿飢えて薬草を嘗めし処なる故名付けたりと此の二険阻を経て眼界稍開く所あり【資料６】

・藤橋といふ　昔は藤蔓を結んだからこの名がある　橋を渡ると忽ち険阻な阪路となる　有頼卿が熊を追ふて此処まで来た　するとどこからともなく黄金色の猪が駆け走り来て卿を背中に乗せ川を渡つて来たが　此の阪で間もなく姿が消え失せてしまつたといふので黄金阪と呼ぶ　夫れから有頼卿が飢えて薬草を食べた所だといふ草生阪【資料７】

○断截坂

・美女坂（美女杉）六部落を過ぎて断截坂となる　開祖有頼卿の雷獣を斬りし古蹟にして有頼卿此処にて正気を失ひ大汝神に霊薬を授かり給ひし霊蹟なり【資料５】

・断截阪は開祖有頼卿の雷獣を斬りし古蹟にて有頼卿は此処にて生気を失ひ大汝神に医薬を授かり給ひし霊蹟にて立山に大汝神を祀るはこの因縁によると云へり【資料６】

・有頼卿が雷獣を斬つた古蹟を断截阪といふ　卿は此処で正気を失ひ医神から医薬を授かつた霊蹟で立山に大汝神を祀るはこの縁によるといふ【資料７】

○刈安坂

・○称名滝　有頼卿が刈安阪で滝の音を聞えて念仏の声の美妙であると打喜び安々と阪を越えて此処で滝を拝んだと伝へ【資料７】

この他に吉澤庄作の【資料９】『立山遊覧』（大正 11 年）、【資料10】『立山』（大正14年〈1925〉）も登山案内と同じ系統である。吉澤は登山家でもあったが旧制魚津中学校の博物学教師であり、内容に学術的な正確さを期したようで、神保小虎（地質鉱物学）、山崎直方（地理学）、岡田武松（気象学）、武田久吉（植物学）、小泉源一（植物学）といった当時の錚々たる学者の校閲を受けている。また佐伯有義（神道学者・岩峅寺永泉坊）が序文を寄せているが、当然縁起や伝承の内容にもその校閲が入っていたと思われる。人文系は「立山の伝説」を項立てし、「かりやす坂」には「有頼此地に来りて遠く響く勝妙滝（称名滝の古名）の、さながら称名念仏の声の如く美妙に響けは容易く登り得たりとて名つけたり」と説話を載せている。その他に材木坂、禿杉、姥石の説話も記述するが、特に禿杉、鏡石については、女人禁制を犯した止于呂尼の説話ではなく、以下のような芦峅寺に伝わる有頼に仕えた少女が杉になる説話、有頼の乳母が投げた鏡が石になる説話を載せている点が注目される。登山の際に芦峅寺の仲語から聞いた話が元になっていたのかもしれない。

○禿　杉

・伝え曰ふ「開祖有頼に仕へし一女子、卿を慕うて乳母と共に此地まで来り、進むを得ず杉に化したり」と【資料９】（【資料10】もほぼ同文）

○鏡　石

・伝え曰ふ「有頼卿の姥が、尋ねて姥懐まで来たが、もう進むことが、出来なくなつて、せめては鏡にてもとて携へたる者を投げたのが石に化したり」と【資料９】（【資料10】もほぼ同文）

（２）学校教育との関連から

明治末年以降、尋常高等小学校や中学校、女学校の生徒が学校登山を行うようになるが、この流れもまた間接的に関わりがあったと考えられる。

その他に、大井冷光が大正４年を中心に県内の小学校で口述童話会を行っていたことが挙げられる[27]。**【資料３】**やそれを改稿した**【資料４】**もその演目にあったことは十分に考えられるからである。そこでは、有頼を模範的な少年としてとらえ、それに倣うことで少年の健全な成長に繋げようとした冷光の意識が、大正期の「児童中心の個性教育」や「道徳意識の発達」を踏まえた学校現場の思いに重なり、道徳的な読み物に援用されていたのではないかと思われる。

【資料13】「高志の白鷹 佐伯有頼公」は富山女子師範附属小学校で昭和９年（1934）に編集されたものである。既に他県では大正時代から師範学校の附属小学校で児童への修身教授のための実践的な研究が見られており[28]、本県でも同様の動きがあったのではないかと想像される。そう考えると**【資料13】**の内容は、修身的な教育で副読本のような利用を想定して作られたのではないかと思われる。内容の比較については、後述する。

次に、**【資料22】**「白タカとクマと立山」では、巻頭に置かれたはじめのことばに、「立山町と自分のかかわりについての理解を、今まで以上にすばらしいものにしていただけたらと祈ってやみません」。また、あとがきには「郷土立山町のほこりとして、末長く心にとどめておきたい、先人の話やいい伝えなどを書いたものです」とあるように、郷土教育、ふるさと学習のために同町の小学生向けの副教材を想定してリライトされた作品と考えられる。本文は、文末に「この物語は、古い書物『立山縁起』に立山開山にまつわる物語として書かれている」と示した上で、芦峅寺に伝わる説話を基にしている。また、有頼が横から現れた熊に矢を放った場所が「横矢」→「横江」の地名譚、熊が流した血が懸った場所が「血懸」→「千垣」の地名譚として挿入される他、「サブストーリー」が作られた場所「藤橋」、「草生坂」、「断截坂」、「刈安坂」をほぼすべて文末に〈 〉で載せており、郷土立山に伝承する「有頼開山説話」の全容を紹介しようとしていることが窺われる内容である。

また、神仏名は生かされて「立山の大汝の神様」、「阿弥陀如来様」の言葉が出て来るが、宗教的という意味ではなく、郷土に伝わる説話の内容をなるべく原話を生かしつつ、易しくリライトした意図が見える。

○藤　橋

・どこからともなく数十匹のサルが集まり、藤づるを持ちよって、みるみるうちにかけ橋を作り、またたく間に姿を消してしまった、（中略）その橋を渡り、おく山へ進もうとした。すると今度は、金色の大シカがあらわれ、前に立ちはだかり、行手をさえぎった。「じゃまだてするな。」気の強い有頼は、刀を抜いてその大シカにたちむかい、うちたおそうとしたが、大シカの毒気にあてられ、気が遠くなり、その場にたおれてしまった。〈藤橋〉

○草生坂

・そばらくして息をふきかえした有頼の体は、寒さとつかれと空腹で思うように動かなかった。（中略）岩かげに芽生えている青草をとって食べると、不思議や、体中に力がみなぎり元気をとりもどした。〈草生坂〉

○断截坂

・歯をくいしばり、いくつかの坂をこえた時、にわかに辺りがまっ暗になり、いなずまがひらめき、雷鳴がとどろき、とつぜんうなり声をあげた雷獣が暗やみからおそいかかってきた。すかさず、有頼は、刀をぬいてきりつけると、たしかな手ごたえがあり、急にまわりが明るくなり、雷鳴もおさまった。〈断截坂〉

○仮安坂

・有頼はさらに、けわしい山坂をはうように登っていったが、ついに力がつき、動けなくなった。その時である。どこからともなく、おおぜいの仏様の、合掌念仏をとなえている声が聞こえてきた。それをじっと聞いていると、つかれもなおり、そのけわしい坂を、やすやすと登りつめることができた。〈仮安坂〉

（３）観光化との関連から

【資料21】『立山の民話』、**【資料26】**『立山と黒部の昔ばなし』は、立山の観光関連企業、立山黒部貫光、立山貫光ターミナルが刊行したものである。どちらも「サブストーリー」は黄金の猪による渡河のみを載せている。

立山が観光地として脚光を浴び立山黒部アルペンルートが開通すると、昭和50年代はじめからターミナル駅売店などでの販売を目的に観光客用に立山に纏わる昔話を集めた小冊子が作られるようになった。発行部数は不明だが、**【資料21】**は好評だったようで、毎年のように装丁を改版しタイトルを変え、立山黒部アルペンルートの旅記念スタンプを押す頁も付いた異本が増刷されたようである。また**【資料26】**はタイトルを変えた『立山の昔話』（立山黒部貫光・立山貫光ターミナル、刊行年不明）も作られている[29]。国立国会図書館の所蔵目録情報には「100万部出版記念特別号」と入った版も見えるので、観光客用に大量に販売されたことが窺われる。県内外への「有頼開山説話」の拡散という点では非常に大きな役割を果たしていたと言えるだろう。

何れも基本的な「有頼開山説話」のストーリーに大きな違いは見られないが、それでもリライトした作者の感性や言葉の選び方で差異の生じている箇所が見られる。玉殿窟の場面ではそれぞれ、

・その時、有頼少年は矢傷をうけながら立っておられる神の姿を見たのです。あまりのかしこさにおどろきひれふす有頼に「大熊も金色の猪も、みな立山の神の化身なり。汝、僧になって、この山を開くがよい。」とお告げになられました。**【資料21】**

・金色に輝く阿弥陀如来が立っておられました。なんと、阿弥陀如来の胸に矢が立っているではありませんか。思わず、ひれふした有頼に、仏がお告げになりました。「大熊も白鷹も、猪も、立山神の化身（神仏が、姿を変えてあらわれること）であったのです。さっそく僧になって、この山を開きなさい」**【資料26】**

とある。両者とも「猪も阿弥陀如来の化身であった」と告げるが、この表現は他のリライト作品には見られない。また、何れも有頼に出家を促しているが、**【資料21】**では神仏の名前を出さず「神＝立山の神」の構図なのに対し、**【資料26】**では阿弥陀如来の名を出し「阿弥陀如来＝立山神」とする点で仏教色が残されているようである。

３－２－３　リライトの方針や系統の小括

（１）推定されるリライトの方針

明治以降、プロットが胚胎していた宗教的な枠を離れ、民間説話として拡散する際に大きな役割を果たしてきたのは、伝承を採話しリライトして創作された物語やお伽噺であった。

明治末から今日までたくさんのリライト本が刊行されているが、小論で資料としたうち童話や伝説集・説話集に載るリライト作品の表現を比較したとき、それぞれに作者の解釈が加わるのは当然として、リライトの傾向、或いは方法が見え、それは凡そ次の４点にまとめられる。

（ア）元々は宗教的な説話であったことで書かれている特定の神仏名を書き換え、宗教色を希薄にする。

（イ）登場するキャラクターに具体的な描写の肉付けを施し、人格を持たせたり台詞を創作し会話を挿入したりすることでストーリー性を強め、臨場感を高める。

（ウ）有頼の登山行程にすべてのサブストーリーを網羅するのではなく、有頼の出自から開山、入滅まで

の場面を選択的に割愛し、要約している場合が多いようである。そこにはリライト者の意図があったと思われるが、原稿の長さの制約も関係しているのではないかと思われる。

（エ）「有頼開山説話」に登場する者、または別のキャラクターを登場させた全く新しいオリジナルでのスピンオフのエピソードを創作し挿入するような形の改変は見られない。

（２）冷光の童話からのリライト作品の系統

現在読まれる「有頼開山説話」は、先行して刊行された内容を基にして大なり小なり表現を変えながらリライトが繰り返されてきた。そのため、細部の表現や登場人物や場面設定を子細に比較することで、リライトの際に作者が参照した基の話の系統を遡れるものがある。

冷光の童話をリライトした作品には、**【資料３】**を基にしたものと**【資料４】**を基にしたものとが存在するが、３－１の（２）で前述したように、描写の違いを比較することでどちらが基にされたのか区別できる箇所がある。リライト作者の選択の意図を知るには至らないが、これは冷光作品の評価にも関係する点であろう。

①【資料３】「佐伯有頼」をリライトして創作されたと考えられる作品

【資料13】は、前述のように学校教育での副読本に利用されたと見られるものだが、冒頭に東宮時代の昭和天皇の御歌を載せ、続けて「この御歌は、おそれ多くも、今上天皇が東宮におはしまたころ、我が富山県へ行啓あそばされた時、大空にそびえてゐる立山の雄々しい姿を御らんになつて、お読みあそばされた御歌であることは、皆さんよくごぞんじの筈であります」と前書きを付ける。続けて、**【資料３】**では「仏様」とあった部分をすべて「神様」に、また「阿弥陀如来」を「立山権現」と書き換えたのは、皇国史観に基づく時代背景の影響があろう。その他は**【資料３】**の表現や台詞回しをほぼそのまま使ってリライトしているが、**【資料３】**は会話を多用しているので、低学年の児童にも分かり易いと考えて使用したのかもしれない。

②【資料４】『立山昔話』をリライトして創作されたと考えられる作品

【資料３】と**【資料４】**の違いは、草生坂の部分の有無の他、３－１の（２）に挙げたように、冷光の改稿による比較の〈ポイント〉に見える。管見した中で**【資料４】**とのリライト関係が分かる作品は、**【資料15】**「霊峰立山を開いた有頼」、**【資料17】**「立山の開山」、**【資料23】**「有頼少年と白タカ―立山開山―」、**【資料25】**「立山開山の話」の４作品である。

【資料15】は、登場人物の表現や場面設定の類似、草生坂の場面の割愛などで**【資料４】**の内容と表現とほぼ一致するが、以下のように僅かに創作を加え書き改めた部分が散見される。

・或る日のこと、この有頼は二人の召使をつれて野原に出て、鷹狩りをしようと思ひました**【資料４】**
・ある日のこと、一人の召使をつれて野原にいで鷹狩りえおしようと、父の飼っている白鷹をお願いして借りだし、こおどりして出かけた。**【資料15】**

・「アア、その白い羽の鷹ならはこの方角、東南の方を指して尋ねてごらん」**【資料４】**
・「ああ、あれか、あの白鷹なら、北の方をさして尋ねてごらんなさい。」**【資料15】**

藤橋で黄金色の猪を発見したとき、その前の場面で熊が出てきたことを承けて、

・「『こいつ又手むかうといふのか』と有頼は弓を取り直して構へますと」**【資料４】**
・「『一難去ってまた一難来るか』と弓を構えると」**【資料15】**

と、特徴的な台詞の創作が見られる。

【資料17】も部分的に創作を加え書き改めつつ基本的な表現はほぼ類似するが、直接的には**【資料15】**を基にリライトしたと言った方がいい作品である。

そこで、**【資料４】**と上記のリライト作品４つを校勘すると、次のような特徴が見える。

・「召使いの数」は【資料４】では「二人」、【資料15】と【資料17】は共に「一人」とする。
・白鷹の去った方角は、【資料４】には「東南の方」、【資料 15】では「北の方」とあったが、【資料 17】では「辰巳（東南）」となっている。
・【資料23】では、草生坂の割愛、白鷹を呼子笛で呼び寄せようとする点、熊が白鷹ではなく「有頼に」襲いかかってきた設定で書かれているなどの点では【資料４】と描写が一致する。但し紙面の都合からか、藤橋から仮安坂までの「サブストーリー」はすべて割愛しており、内容の関係性はそれほど強いとは言えない。白鷹の行く先を教える森尻権現と、数珠と剣を手にした刀尾天神を書いているが、『和漢三才図会』から引き写しによる誤記[30]は無い。
・【資料25】は、全体を簡潔に要約しているが【資料23】と同様の点に加えて、断截坂で遭遇した獣にとどめを刺していない点で【資料４】を参照した形跡が見られる。

結びに代えて

明治以降「有頼開山説話」が拡散した経緯を見ると、霊山の伝統、立山の民俗や地理を踏まえた浅地倫による登山記『立山権現』の刊行が大きな役割を果たしていたことがわかる。それに続き大井冷光は、岩峅寺の伝承に取材して採話したストーリーに潤色し解釈を加え「サブストーリー」を選択した童話を創作したが、そこには自身の立山や有頼への思い入れも込めた有頼観の転換があったと考える。その後のリライト作品の多くが、そのような初期の童話作品などをアレンジするものであったから、「サブストーリー」については、結果的に浅地倫や大井冷光が最初期に採話しリライトをした岩峅寺に伝わる説話を多く紹介することになったと考えられる。

そして近代登山の中で山を楽しむ人々との関係では、大正時代の大衆登山ブーム時に相次いだ登山案内書の刊行や、立山黒部アルペンルート開業に関連して観光客向けに作られた各種の冊子も、同じ文脈の中で見ることができるだろう。

また富山では、小中学生向けに様々なリライト作品が作られてきたことも特徴と言える。それらを通して郷土学習の中で立山の歴史や信仰文化に触れる機会が少なくないため、児童生徒にとっては最初に出会った童話や伝説に書かれた「サブストーリー」が記憶に定着することになるのであろう。

リライト作品とは異なるが、当館遙望館で開館当初から上映する人文系映像「新立山曼荼羅絵図」（島村達雄監督、白組制作、1990年）は、有頼の渡河シーンでは猿が藤橋を架ける説話を採った一方で、勿論そこには制作者の解釈があった訳だが、鹿や草生坂、断截坂などのサブストーリーはカットされている。アニメーションやＳＦＸを駆使して視覚的に分かりやすく訴求力のある作品で、これまでたくさんの方々に観ていただいているので、「サブストーリー」拡散の上で果たした役割は小さくない。また展示館エントランスに設置したビデオブースの「立山物語」（北日本放送制作）も「有頼開山説話」の紹介で開館以来放映しているものだが、『和漢三才図会』を基にしつつ、脚本の表現やキャラクター設定を見ると【資料14】が参照されていたようである[31]。これら映像作品の内容も、少なからず「サブストーリー」の定着に関与してきたと言ってよいだろう。

立山信仰に関連する伝説には「有頼開山説話」以外にも、山中の登山道には荒唐無稽な話も含め、豊かな内容の説話が形成されている。小論では「有頼開山説話」に限定した資料を基にしたために割愛したが、女人禁制にまつわる美女杉、禿杉、姥石、鏡石、材木石の説話や、桑谷、獅子が鼻、立山地獄、みくりが池など多数があり、これらにも芦峅寺、岩峅寺でそれぞれ解釈の異なる説話の伝承が散見される。それらもまた、衆徒が自坊に投宿した登拝者や布教先へ出かけ、立山曼荼羅を絵解きした際に語られたり、立山へ禅定登山に訪れた者に仲語が現地で道々語って聞かせたりしてきたものであろう。

長い歴史の中で淘汰された話もあっただろうが、今日まで「立山信仰に纏わる様々な伝説」として流布し

てきたものは、立山を彩る無形の資料群である。

解釈の異なる様々な「サブストーリー」に対して、聞き慣れた一方を正しい説話とか、馴染みのないものが異説とするような見方は偏見で、先に広く拡散したため聞き慣れているものに親しんでしまっただけのことである。本来はたくさんの説話を生んだことを、立山の自然とそこで暮らす人々の関わり豊かさとして認識すべきであろう。その意味で、現在も多様な説話のバリエーションを採話し、残すことの重要さは増していると考える。

［註］

（１）加藤基樹氏は、隠岐の島の高田神社に南北朝時代の嘉慶２年（1388）に奉納されたものを基に慶長４年（1599）の写本で元和元年（1615）に奉納された丹表紙本『高田大明神縁起』に見える「在能、有頼、求メシカハ熊獣ヲ血塗ニ、聖容顕岩室而、示金身」から、これを有頼の初出としている。加藤基樹「立山開山縁起研究の展望」（富山県立山博物館平成27年度後期特別企画展「立山と白山―北陸霊山の開山伝承―」解説図録）59～61頁参照。それに対して山吉頌平氏は、慶長４年（1599）の写本の中にある有頼の記述は、『麗気記拾遺鈔』（応永８年〈1401〉）にある有頼について記載した部分から引き写されたものであること基に、現時点で有頼の初出史料を『麗気記拾遺鈔』としている。山吉頌平「丹表紙本『高田大明神縁起』の再検討」（『富山史壇』193号、2020年）、１～13頁参照。何れにしても『伊呂波字類抄』、『類聚既験抄』よりも後の初出となる。

（２）加藤基樹「立山権現［矢疵阿弥陀如来］の史料的考察―立山信仰と生身仏信仰―」（富山県立山博物館『研究紀要』24号、2017年）、53頁参照。

（３）廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、昭和59年）、53～59頁参照。岩峅寺延命院に伝わる『立山手引草』は、開山縁起に「サブストーリー」が挿入された内容で、絵解きの台本と言われているが、現在それ以外に同様のテキストは発見されていない。

（４）廣瀬誠「立山開山の縁起と伝承」（高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』所収、名著出版、1977年）、225頁参照。宿坊の衆徒は各地で絵解きによって開山の由来を語り、仲語は山中を案内し実地唱導を行う立場であったことを紹介する。

（５）翁久允「立山伝説の考察」（『高志人』第２巻９号、1937年）、63頁参照。昭和の初め頃に立山ガイドと登山した際のことと見られるが、「この間、『仲語』と山を歩きながら、立山伝説を少しきかしてくれとねだつたら、勿論われわれの知つている範囲以外の何物も知ってはゐなかったけれど、彼の語り口は頗る嘲笑的だつた。（中略）みんな昔の坊主や神主共の子供だましなお賽銭取りの為に作つたようなもので、今の人達に話しなどしたら叱られますよ、と言ふのだつた。仲語それ自身が昔は、この伝説が一つの金袋でもあつたのだ。だから彼らの悧巧なもの共は坊主以上に勝手な伝説を創作したことであつたらう。鍋冠杉だの、尼の小便所だの（中略）、言はれて見れば、なるほどさうかなァと頷かれるやうな断片的な荒唐無稽な伝説は、恐らく彼らに依つて作られたものに違ひない」とある。また、大井冷光も『立山案内』の中で「古へは御中語様と称へて甚だ山法師気質を有し、登山者に対し、山中の奇岩怪木に誇大的迷説口碑を付して浄財喜捨をすゝめしもの」と書いている。近代以降に立山で禅定登山に関わっていた者の中にあった仲語に対する考え方が窺われる内容である。

（６）五来重「寺社縁起からお伽噺へ」（宗教民俗集成６『寺社縁起からお伽噺へ』、角川書店、平成７年）、43～51頁参照。五来氏は寺社縁起について「歴史的縁起」と「物語的縁起」の分類を主張し、物語的縁起からお伽噺や昔話への発展の視点を提起している。また民間説話についても何らかの形で奇跡や怪異、呪術など宗教性が必要であったと主張する。同じ視点から、神仏の加護に依って難を逃れたり、神仏の化身としての動物を登場させたりする点を指摘する。

（７）昭和30年代後半から50年代にかけて、芦峅寺、岩峅寺の旧宿坊家、岩峅寺雄山神社などが所蔵する文書類の調査、研究者による翻刻が進められ、『越中立山古文書』（木倉豊信編）、『越中立山古記録』（廣瀬誠・高瀬保編）が刊行された。『富山県史』や『立山町史』の付録にも立山の縁起類を翻刻し収録している。小論での引用は、『富山県史 史料編Ⅰ 古代』や『立山町史 上』に収録の翻刻による。

（８）『和漢三才図会』の木版本では「刀尾」は「力尾」と誤刻され、「力尾天神」となっている。そこから直接引用したリライト作品では、誤りのまま「力尾天神」としているものがある。また「力尾大神」としたものも見られるが、これは版が違う木版本の後刻のためか、リライトした際に見誤ったものか確認できない。

（９）『和漢三才図会』巻第38 獣類の「獅子」の項では「狻猊」を当て、「西域に出づ、状虎の如にして小なり、黄色亦金色の尨犬如にして頭大く尾長し」と説明されている。

(10) 立山曼荼羅には猿のみが描かれるもの、有頼と猿がペアで描かれたものは見つかっていないので、藤橋の説話は、絵解きで語られる際には、有頼の渡河よりも高僧が訪れたことを強調するものになっていたとも考えられる。
(11) 中村元監修・松本照敬訳『ジャータカ全集 5』(春秋社、1982年)、89～93頁参照。
(12)『越中志徴』(富山新聞社、1973年)、592頁参照。森田柿園『越中志徴』巻6には『卍山広記立山寄付券記序』を引用し「山径険而茅塞。山川急而無レ橋。古来欲レ登レ者無レ不レ患レ之。茲加州金沢道俗。見二其如一レ是。捨レ財作レ券。寄二附之岩崎(ママ)寺一。」とある。岩峅寺にとって、実際の「藤橋」が浄財によって架けられ岩峅寺が管理する事実があることを尊重して、芦峅寺に伝わる「猿による架橋」という伝承は排除する立場であったのではないかと思われる。
(13)「浄土宗」公式サイト 浄土教新聞「連載 仏教と動物 第4回 師子にまつわるお話」https://jodo.or.jp/newspaper/special/2276/(参照 2024/11/4)参照。「獅子座」とは獅子の姿を模った仏座で、日本にも中国から「唐獅子」の伝来と同時に仏教の獅子座の思想も伝わった。奈良時代や平安時代に密教が伝来するが、それら密教の仏には獣を模った仏座(獣座)に坐るものが多い。その中で獅子に乗るのは、毘盧遮那如来(大日如来)、文殊菩薩、また不動明王など、とある。また『望月佛教大辞典』(増訂版)には「大聖不動明王守護国界法にも『金色の師子王に乗りて座とす。左右には八童子使者侍立し、本尊を囲繞す』」とある。
(14)『立山町史　別冊』(立山町、昭和59年)、205頁「藤橋の伝説」参照。
(15) 立山曼荼羅金蔵院本(金蔵院蔵)。当館では芦峅寺宿坊の檀那場と関係すると考えられる立山曼荼羅に分類している。
(16) 奥澤真一郎「Ⅳ 立山に魅せられた越中の文人たち」(富山県立山博物館平成26年度特別企画展「近代の文人と立山」解説図録)、56頁参照。
(17) 廣瀬誠「解題」(『〈復刻版〉立山連峰誌料』、新興出版社、1991年)、11頁参照。
(18) 大正期には学校や講堂などで童話を子供たちに語って聞かせる「口演童話」が盛んであり、冷光も巌谷小波や久留島武彦らと供に積極的に童話の口演を行っていた。その際に「有頼開山説話」をリライトした自作の童話も語っているが、これは家庭内の親子間での語りとは性格が違い、刊行物を読むことで拡散することと同様と見てよいと考える。
(19) 加藤基樹「こころをうつす絵鏡―立山博物館会場における展示概要―」(富山県立山博物館開館20周年企画展「綜覧 立山曼荼羅」解説図録、2011年)、124～127頁参照。
(20) 廣瀬誠「山と児童の文学者　大井冷光の生涯」(『とやま文学』第8号、平成2年)、126～138頁参照。
(21) 註(20)に同じ。
(22) 大井冷光は、「少年銅像を建設の計画を持つて五年振りに富山に帰る」(『少年』第142号、時事新報社、大正4年)の中で、「立山に初めて登った小勇士この越中の代表的の名山立山には昔からこの国の男と生まれて十三になるまでに必ず登ることと定まつてゐた、あの九千九百尺の頂上の室堂に一夜をあかし、権現様に参詣をして、(中略)麓までかへると、そこでは村中の人々から馬を飾り酒や肴を持つて、凱旋将軍を迎へる様に賑はしく迎へられる。(中略)村へ帰へると、先ず氏神様へ参詣をして、個別に挨拶も済んでさて愈よ祝宴となる。この立山帰りの祝宴は又或意味に於いてこの児首尾よく青年となり得た、立山登山したことによつて一人前の男子となり得る資格を備へたと、いふその意味の祝宴でもあつたのだ。(中略)この様に立山登山なることは旧藩時代から越中全国に亘つて風教上の力強い感化を与へてゐるものである。」と書いているが、これは自身の体験ではなく、また目撃談でもない。また、廣瀬誠氏は『立山のいぶき』(シー・エー・ピー、1992年)で、古来富山にあった元服登山の習慣によって、縁起に書かれる開山が有若によるものから有頼を主人公にするものに変わった可能性を指摘する。
(23)『立山昔話』には、大井冷光が建立を立案した「佐伯有頼像」の原型を畑正吉が製作する際にも、佐伯有義の考証を受けたことが記されている。
(24)『立山のはなし』の作者野島好二氏は、同書に「私は先日、芦峅寺にある開山堂に詣で、親しく立山開山佐伯有頼の法体慈興上人の尊像をおがませていただいた」と書いている。その際に『霊峰立山』筆者の宮司佐伯幸長氏に取材した可能性が高く、幸長氏が纏めた草稿などの資料も参照していた可能性が推察される。
(25)「Ⅲ 大衆、山へ―社会と山の相互作用―」(富山県立山博物館平成20年度特別企画展「大衆、山へ」展示解説書)、16～27頁参照。
(26) 立山登山会が編集した『立山』は大正4年に初版発行後、大正6年には内容はそのままに『立山案内』と改題して立山登山会が発行、以後大正7年には3版を発行する。4版は同8年に雄山神社社務所が発行。同11年には再び『立山』と改題し雄山神社社務所が発行している。
(27) 大村歌子編『天の一方より 大井冷光作品集』(桂書房、1997年)、「大井冷光(勝信)年譜」414～415頁参照。大正4年5月から12月までに県内で60余りの小学校や社会団体で口演を行っていたことが紹介される。

（28）篠崎正典「大正期の修身教授における「道徳意識の発達」の導入―長野県内小学校修身訓練研究会（1913）への対応に着目して―」（『信州大学教育学部研究論集』第17号、2023年）、24～35頁参照。

（29）富山県立図書館には一種のみ所蔵するが、目録を見る限り国立国会図書館には15冊の所蔵がある。昭和50年代には毎年のように改版して刊行し、お土産品として売り上げていたもののようである。

（30）**【資料 9】**、**【資料10】**、**【資料11】**、**【資料14】**には、何れも『和漢三才図会』木版本や初期の翻刻本に見られる、刀尾天神を「力尾天神」、「力尾大神」とする誤記をそのまま引用している。

（31）脚本、制作は川内康範。漆間元三氏が内容に助言を行ったようである。作品中で採られている「サブストーリー」では、有頼が飛来した白鷹を「白丸」と名付けて飼うこと、刀尾天神に会いそこで伝言を受ける場面、有頼が刀尾天神に「貴方は鳥の言葉が分かるのか」と尋ねる台詞などが**【資料14】**にのみ見られる特徴的な点である。

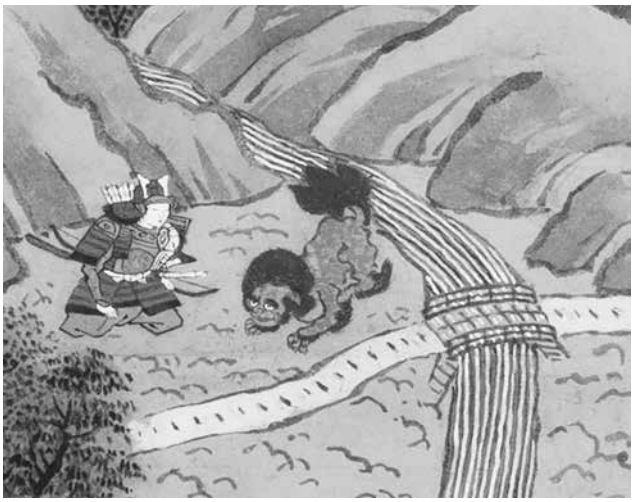

写真１
「立山曼荼羅 専称寺本」（富山県立山博物館蔵）より部分
川の手前に描かれる「有頼」（左）と「黄金の獅子」（右）

写真２
「立山曼荼羅 立山博物館I本」（富山県立山博物館蔵）より部分
川を挟んで左に僧、右に猿。川を渡った後に倒れる有頼。中央の橋は左の大岩（座禅岩）に巻き付けられた藤蔓が表現され、中央下の川べりには逃げる熊が流した血のような跡が描かれる。

表２　「明治以降のリライト作品」

番号	書　名	作者 / 編者	刊行年	発行元	有頼誕生の場所	遭遇して白鷹の行方を示す者（風体）	覚悟を問われる	藤橋渡河
1	『立山権現』	浅地　倫	明治36（1903）	中田書店	記載なし	１老翁（名前なし。垢じみた布子を纏って、銀線を束ねたような髪を垂らし、禿頭隆く炯然たる眼球が深く窪み言葉が倨傲な風体）	記載なし	金色の猛猪が現れ、有頼を背負う。
2	『立山案内』	大井冷光	明治41（1908）	清明堂書店	記載なし	記載なし	記載なし	金色の猛猪が現れ、有頼を乗せて渡る。
3	『越中お伽噺 第二編』「佐伯有頼」	大井冷光	明治42（1909）	清明堂書店	未　詳	妙な格好の１人の老人（名前なし。銀の針金のような長い髭、眼をぎらぎらさせて恐ろしそうな人）	記載なし	金の光を放った猪が現れ、その背に乗る。
4	『立山昔話』	大井冷光	大正4（1915）	有頼会	未　詳	気高い老人（銀の針金のような長い髯、ぎらぎらした眼で有頼を見る）	記載なし	黄金色の毛皮をした猪が現れ、有頼はその背に乗って渡る。
5	『立山』（『立山案内』）	立山登山会	大正4（1915）	立山登山会（雄山神社社務所）	記載なし	記載なし	記載なし	黄金色の猪が現れ、有頼を背に乗せて渡す。
6	『最新越中立山案内』「立山と人文」	高見清平	大正7（1918）	高見活版所	記載なし	記載なし	記載なし	黄金色の猪が現れ、有頼を背に乗せて渡す。
7	『立山案内記』「立山と人文」	小柴直矩	大正7（1918）	高見活版所	記載なし	記載なし	記載なし	黄金色の猪が走り来て、有頼を背に乗せて渡す。
8	『母のお伽噺　プリムラの巻』「白い鷹」	大井冷光	大正9（1920）	ヨウネン社	未　詳	気高いお爺さん（髪も髯も銀色）	記載なし	金色の猪が跳び出す。有頼は背にとび乗り、川を渡る。
9	『立山遊覧』「立山の開基に関する伝説」	吉澤庄作	大正11（1922）	中田書店	未　詳	①森尻の権現 ②１老人（右手に剣、左手に念珠） →「当山力尾大神」と明かす	記載なし	記載なし

表１　「有頼渡河の場面に特徴的な立山曼荼羅」

番号	名　称	所　蔵	宿坊家との関係	特　徴	備　考
1	泉蔵坊本	円隆寺	芦峅寺	藤橋奥に猿１匹。藤橋手前で座禅を組む僧。	
2	宝泉坊本	個人	芦峅寺	藤橋途中に猿１匹、奥に２匹。藤橋手前に旅装の僧。	３と模写関係
3	吉祥坊本	立山博物館	芦峅寺	藤橋途中に猿１匹、奥に２匹。藤橋手前に旅装の僧。	２と模写関係
4	立山博物館Ｄ本	立山博物館	芦峅寺	藤橋途中に猿１匹。藤橋手前に旅装の僧。	
5	立山博物館Ｆ本	立山博物館	芦峅寺	藤橋奥に猿１匹。藤橋手前に座禅を組む僧。	
6	立山博物館Ｉ本	立山博物館	芦峅寺	藤橋奥に猿３匹。藤橋手前に旅装の僧。	黄金坂・草生坂付近に倒れた有頼。藤橋付近に熊の血の跡。座禅岩に藤を巻く。＊写真２参照
7	立山町本	立山町	芦峅寺	藤橋奥に猿１匹。藤橋手前に座禅を組む僧。	芦峅寺長覚坊旧蔵
8	筒井家本	個人	芦峅寺	藤橋手前に猿３匹。藤橋手前に座禅を組む僧。	芦峅寺宝龍坊旧蔵
9	立山黒部貫光株式会社本	立山黒部貫光株式会社	芦峅寺	藤橋奥に猿２匹。藤橋手前に旅装の僧。	
10	中道坊本	個人	岩峅寺	藤橋手前に黄金の獅子。	
11	専称寺本	立山博物館	岩峅寺	藤橋手前に黄金の獅子。	＊写真１参照
12	竹内家本	個人	岩峅寺	藤橋手前に有頼が背に乗る黄金の獅子。	

黄金坂	草生坂	断截坂	カリヤス坂	備考／その他の特徴事項
向こう岸に着き、振り返ると猪は姿を隠していた。	空腹のため止むなく辺に茂る草を摘んで嘗め、食べると忽ち満腹する。	妖雲が沸き、強雨、閃光雷、鳴雷の中雷獣が現れ、刀で斬ると雲が去り雨止み天は晴れた。	遠雷のような称名滝の轟音。仲語は「ここで人語を発すれば滝壺から竜蛇が来て呑まれる」という。	カリヤス坂で仲語が語る内容は付会だが、景色は物凄いとの感想。
猪は渡河の後姿を隠した。	有頼が飢えて草を食べた所	雷獣を退治した所	有頼は瀑声を聞き、念仏の声の如く美妙なりと喜び、易々と坂を越えた。	玉殿の岩屋では、夜に奇瑞の夢を見る。
有頼を置き、すぐにどこかへ行く。	空腹で、手当たり次第に草木を毟って食べると大変美味しく忽ち満腹になり、元気を盛り返す。	俄かに雷雨。闇から出てきた怪しい獣を刀で切り殺すと、明るく好天になる。	記載なし	玉殿の岩屋では、御光を放った仏様が胸に矢傷を受けながら笑っている。
有頼がお礼も言わない中にフイと姿を隠す。	記載なし	俄かに曇り雷鳴、夕立ち。闇中の奇妙な獣を腰刀で刺すと姿を隠し、晴れて明るくなる。	記載なし	玉殿の岩屋では、神々しい仏は３体、胸に矢傷を受けながら立つ。資料４は資料３を改稿したもの。
猪の姿が失せた。	飢えて薬草を嘗めた。	雷獣を斬った古跡。ここで正気を失い、医神から医薬を授かった。	記載なし	大正４年に第１版発行の後、6、7、8、11 年に版を重ねる。
黄金色の猪の姿が失せた。	飢えて薬草を嘗めた処。	雷獣を斬った古跡。ここで正気を失い、医神から医薬を授かった。	記載なし	資料７と資料８は同年同月に同じ所（高見活版所）から発行され、内容も同じ。
黄金色の猪の姿が消え失せた。	飢えて薬草を嘗めた処。	雷獣を斬った古跡。ここで正気を失い、医神から医薬を授かった。	滝の音が念仏の美妙な声に聞こえ喜び、坂を越えて滝を拝んだ。	
そのまま姿をかくした。	記載なし	真っ暗になり夕立ち。闇の中の奇妙な獣を剣で刺し、逃げると雨が止み晴れあがる。	記載なし	玉殿の岩屋では、仏様がお三方、真ん中の方は胸から血を流す。資料５は資料４を改稿したもの。
名称のみ	名称のみ	名称のみ	遠くの滝の音が称名念仏のように微妙に響き、容易に坂を登り得た。	「和漢三才図会」の収載に従う。力尾は刀尾の誤記。和漢三才図会の誤記をそのまま引用。大神は天神の誤記か。

番号	書　名	作者 / 編者	刊行年	発行元	有頼誕生の場所	遭遇して白鷹の行方を示す者（風体）	覚悟を問われる	藤橋渡河
10	『立山』「立山の開基に関する伝説」	吉澤庄作	大正14(1925)	北陸出版社	未　詳	①森尻の権現 ②当山力尾大神（右手に剣、左手に念珠）	記載なし	記載なし
11	『史蹟名勝天然記念物　調査報告　第九号』「立山の史蹟伝説」	小柴直矩	昭和2(1927)	富山県学務部	未　詳	①森尻の権現 ②一老人（右手に剣、左手に念珠）→当山力尾大神と明かす	記載なし	有頼が金色の猛猪に背負われて渡った跡。
12	『山の伝説　日本アルプス篇』「白鷹（立山）」	青木純二	昭和5(1930)	丁未出版社	未　詳	夢の中で八十ばかりの3人の老翁（阿弥陀如来、釈迦如来、大日如来）が現れる	3人の老翁から（鷹の行方と同時に）	記載なし
13	『高志の白鷹』「高志の白鷹　佐伯有頼公」	富山女子師範附属小学校編	昭和9(1934)	富山女子師範附属小学校	未　詳	妙な身なりをした１人の老人（名前なし。銀の針金のような長い髭、眼をぎらぎらさせながらそばまで来る）	記載なし	金の光りを放った猪が出てきて、その背に乗って渡る。
14	『立山千夜一夜』	池上秀雄	昭和22(1947)	中田書店	都（有若は息子の有頼を連れて越中の国に着く）	①たきぎを担った１人の老人 ②１人の老人（髪も眉もひげも雪のように真白で、右手に剣、左手に数珠を持ち、けいけいと有頼睨む。当山力尾天神の化身）	記載なし	記載なし
15	『越中いまはむかし』「霊峰立山を開いた有頼」	岩佐虎一郎	昭和31(1956)	越中史話会	都（有若は息子の有頼を連れて都を出発、越中の国に着く）	気高い老人（名前なし。銀の針金のような長いひげの生えた、ギラゝした眼で有頼をにらみつける）	記載なし	黄金色をした猪が現れ、有頼は背に乗って渡る。
16	『立山のはなし』「立山の伝説　白鷹の行くえ」	野島好二	昭和32(1957)	北日本文化協会	越中（大汝の神に授けられる）	記載なし	3人の老婆から（芦峅で、白髪を垂れ長い杖を持つ）	沢山の山猿がでてきて藤をもって橋を架ける。
17	『越中伝説集』「立山の開山」	小柴直矩	昭和34(1959)	富山県郷土史会	未　詳	気高い老人（名前なし。銀の針金のような長い髯、ギラギラした眼で有頼を睨む）	記載なし	黄金色の毛皮をした猪した猪が出てくる。有頼はその背に乗って渡る。
18	『立山のてんぐ』「白鷹を追う少年」	稗田菫平	昭和46(1971)	北国出版社	未　詳	１人の仙人（名前なし）	記載なし	金のいのししが有頼を背に乗せて渡す。
19	『越中の伝説』「自然伝説　立山開山」	石崎直義	昭和51(1976)	第一法規	越中（刀尾明神から夢のお告げで授かる）	１人の老人（名前なし）	記載なし	たくさんのサルが出てきて藤蔓をつないで橋を架ける。
20	『日本の伝説 24　富山の伝説』富山伝説散歩「立山開山・佐伯有頼」	石崎直義・大島広志・辺見じゅん編	昭和52(1977)	角川書店	記載なし	矢を放った熊を追う途中で会う、芦の生い茂る神座（芦峅）の老婆	記載なし	記載なし
21	『立山の民話』「立山開山」	立山民話研究会企画	昭和52(1977)	立山黒部貫光／立山貫光ターミナル	記載なし	記載なし	記載なし	金色の猪があらわれ、猪の背を借りて渡る。
22	『立山町の歴史物語』「白タカとクマと立山」	高島昇一他	昭和56(1981)	立山町教育センター	越中（大汝の神様に授けられる）	記載なし	記載なし	数十匹のサルが集まり藤づるで橋をかけ、消え去った。
23	『富山の伝説』「有頼少年と白タカ　－立山開山－」	富山県児童文学研究会担当：長田陶吉	昭和56(1981)	日本標準	未　詳	①１人の老人（名前なし） ②別の老人（右手に剣、左手に数珠）→この山の刀尾天神と明かす	記載なし	記載なし
24	『日本伝説大系 第６巻　北陸編』「有頼の立山びらき」	福田晃編担当：伊藤曙覧	昭和62(1987)	みずうみ書房	未　詳	森尻権現、刀尾天神など	記載なし	記載なし
25	『富山の伝説』「立山開山の話」	石黒渓子	平成5(1993)	桂書房	未　詳	白く長いひげの気品ある老翁	記載なし	金色輝くイノシシが現れ、有頼は背に乗って渡る。
26	『立山と黒部の昔ばなし』「立山を開いた有頼少年」	遠藤和子監修	平成11(1999)	立山黒部貫光	記載なし	記載なし	記載なし	金色の猪が出てきて、有頼を背に乗せて渡す。
27	『語りつぐ富山の民話』「立山をひらいた少年有頼」	稗田菫平編再話：稗田菫平	平成14(2002)	富山県児童文学協会	記載なし	記載なし	記載なし	金色の猪が現れて、有頼を乗せてくれた。

註：有頼誕生の場所欄の未詳は、越中にいたことを示すのみで、生まれが都か、越中か書かれていないもの。

黄金坂	草生坂	断截坂	カリヤス坂	備考／その他の特徴事項
名称のみ	名称のみ	名称のみ	遠くの滝の音が称名念仏のように微妙に響き、容易に坂を登り得た。	「和漢三才図会」の収載に従う。力尾は刀尾の誤記。和漢三才図会の誤記をそのまま引用。大神は天神の誤記か。
有頼を導いた猪の失せた処。	薬草を嘗めて飢えを凌いだ処	雷獣を斬って正気を失った時、医神大汝命から薬草を授かった処。	滝の音を聞き、念仏の声の美妙と喜び、安々と坂を越えられた。	「和漢三才図会」の収載に従う。力尾は刀尾の誤記。和漢三才図会の誤記をそのまま引用。大神は天神の誤記か。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では夢の中に阿弥陀如来、釈迦如来、大日如来が現れる。
すぐにどこかへ行ってしまった。	お腹がすいて、手当たり次第に草木の葉をむしって食べると、大変美味しく忽ち満腹になり元気がつく。	急に曇って電光と雷鳴、風雨。闇から出てきた怪しい獣を刀で切り殺すと、明るく元の好天になる。	記載なし	玉殿の岩屋では、御光を放った神様が、胸に矢傷を受けながら笑っている。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、３体の仏像が安置。矢を受けた像が阿弥陀如来になって現れる。力尾天神は刀尾天神の誤記（「和漢三才図会」を参照か）
有頼を下ろしたと見ると、そのまま姿を消す。	記載なし	空が俄に曇り、雷鳴と夕立、闇から奇怪な獣が行く手を遮る。刀で刺すと悲鳴を上げて消え、空は晴れ上がる。	記載なし	玉殿の岩屋では、黄金色の仏が３体、胸に矢傷を受けて微笑んで立つ。
黄色の鹿が前を遮り、毒気に当たって病になり倒れる。	薬師嶽の神が現れ「手に当たる草を食べよ」と言われ、何か苦い草を口にすると心が爽やかになり病が治った。	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、神々しい立山の神が胸に傷を受けてにこやかに示現。
有頼を下ろすと、そのまま有頼がお礼も言わない中に、フイと姿を隠す。	記載なし	にわかに曇り、雷鳴と夕立、闇を飛び回る奇怪な獣が行く手を邪魔。腰の刀を突き刺すとキャッと一声叫んで姿を隠すと、空は晴れ上がる。	記載なし	玉殿の岩屋では、仏が３体、胸に傷をうけながらにこにこと立つ。内容から見て、資料15「霊峰立山を開いた有頼」のリライトか？
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、「立山のほとけ」が現れた。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では後光さす仏が三尊（聖観音、十一面観音、阿弥陀如来）、右に釈迦如来と薬師如来。左に大日如来と不動明王。中央の仏の胸に矢が刺さっている。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、胸に血を流す阿弥陀如来が立つ。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	熊も金色の猪も皆、立山の神の化身であったと告げる。観光用の冊子で、改版した異本が多数ある。
金色の大シカが現れ、その毒気にあてられ倒れる。	寒さと疲れと空腹の中、岩陰に芽生える青草を食べると力がみなぎり元気になる。	にわかに暗くなり、稲妻と雷鳴が轟く。襲いかかる雷獣を刀で切ると手ごたえがあり、明るくなり雷鳴もおさまった。	力尽きたて動けなくなったが、大勢の仏様の合掌念仏が聞こえ、それを聞くと険しい坂をやすやす登りことができた。	左胸に有頼が射た矢が深く突き刺刺さった、燦然と黄金色に輝く阿弥陀如来が立つ。白タカ、クマ、猿、鹿、雷獣は化身だったと明かす。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、３人の仏が金色の光を放って立つ。
記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	玉殿の岩屋では、光輝く仏が立つ。
ふっとその姿は消えた。	記載なし	空が暗くなり雷鳴と夕立、闇から獣の声が上がり行く手を遮る。刀で切ると手応えがあり、姿が消え晴れる。	記載なし	玉殿の岩屋では、胸に矢傷を負った仏が３体立つ。
向こう岸に着くと去っていった。	記載なし	記載なし	記載なし	同じ内容の異本『立山の昔話』（立山黒部貫光・黒部貫光ターミナル）も刊行された。
そのため向かい側の坂を黄金坂と名付けた。	疲労と空腹で倒れたが、草食べて元気を回復。 鹿の毒にあたって倒れるが、薬師嶽の神から草を食べるよう言われ、草を摘んで食べると元気になった。（２つを紹介）	記載なし	何とも言えないいい滝の音が遠くから聞こえ、近づくと沢山の人の称名念仏にようにも聞こえた（称名滝の地名譚） ※かりやす坂の地名はなし。	草生坂の説話は、岩峅寺の説話の後に「また別の話では」として芦峅寺の説話も併記している。